

人文会ニュース

1995. 8

特集 人文書の戦後50年

〔哲学・思想篇〕.....	今村仁司	2
〔歴史篇〕.....	網野善彦	8
〔政治篇〕.....	増田 弘	13
〔宗教篇〕.....	山折哲雄	19
〔心理篇〕.....	氏原 寛	24
〔教育篇〕.....	影山 昇	30

流れている現在——書店店頭30余年

..... 岩波ブックサービスセンター	柴田 信	35
---------------------	------	----

4年目の春『BOOK LIST 1994』

..... 吉川弘文館	横井真木雄	40
-------------	-------	----

’95年度委員会活動について.....	42
---------------------	----

ユング

そのイメージとことば

A. ヤッフエ編 氏原 寛訳

分析心理学を創設したユングは西洋文明の行き詰まりを予見した極めて今日的な思想家である。その生誕百年を記念して開かれた展覧会での膨大な展示品のなかから私的な写真や初公開の手紙、水彩画など門外不出ともいうべき貴重な資料を収め、人間ユングの生の姿に迫る話題作。

A4変型判/238頁/9888円(税込)

誠信書房

〒112 文京区大塚3-20-6 電話03-3946-5666

忽ち重版

良寛の 呼ぶ聲

■中野孝次

一七五一円

心の豊かさを求め、清貧の境涯を愉しんだ良寛の生き方に学ぶ。混沌の時代への警鐘。書き下ろし完成!

▶定価は消費税込み

春秋社 101東京都千代田区外神田2-18-6
☎3255-9611 振替00180-6-24861

創元社

「日本株式会社」の 昭和史 官僚支配の構造

小林英夫・岡崎哲三・米倉誠一郎+NHK取材班
淵源を満州に求め、資料・証言で描く。 18000円

鈴木昭典 GHQ高官が明かす衝撃の秘話。条文執筆の舞台裏を生々しく再現していく。 25000円

〒541 大阪市中央区淡路町4-3-6
〒162 東京都新宿区山吹町334-11

アメリカ最大のタブーへの挑戦!

人種問題

スタッズ・ターケル 田村・中山・福本訳 あらゆる人種・階層の83人が率直に語る心の奥底。ピューリッツアー賞作家の最新大型インタビュー集。3900円

自分らしく生きるためのヒントー

日本人の老後

60歳から100歳まで100人が語る／グループなごん編 人々の生の声を聞きとり、これからの老後のあり方を浮かびあがらせる大型インタビュー集。2900円

晶文社

東京都千代田区外神田2-1-12
電話03(3255)4501

〈特集〉

人文書の戦後五十年

〔哲学・思想篇〕 今村 仁司

〔歴史篇〕 網野 善彦

〔政治篇〕 増田 弘

〔宗教篇〕 山折 雄

〔心理篇〕 氏原 寛

〔教育篇〕 影山 昇

哲学・思想篇

大塚久雄『共同体の基礎理論』

共同体論と言えば少々堅苦しいようにみえる。しかし六十年前後の思想状況では大塚の共同体論はつねに話題の中心にあった。この書物は小著とはいえ内容は大著に匹敵する。それはマルクスの「資本制生産に先行する諸形態」(『グレントリッセ』の一節)を周到に分析しつつ、共同体の類型論を構成しながら、同時に市民社会概念との差異を裏側から見事に浮き彫りにしてみせた。それは歴史的過去の理解はもとより、歴史的近代の理解を一層深めた。戦後社会科学のなかで市民社会論が大きく登場するためには大塚の共同体論が必要であった。彼の共同体論を一層よく理解するには彼のもう一つの名著『欧州経済史序説』を読むべきであろう。そうすることで、大

今村 仁 司 (東京経済大学)

塚の確立した市民社会論と近代化論を歴史の文脈で把握できる。この背後に共同体論があることを忘れるべきではない。現在、奇妙な共同体主義への先祖返り現象が生まれつつあるとき、再度大塚の共同体論の熾烈な問題意識を共有すべきではないか。

丸山真男『現代政治の思想と行動』

丸山はエポックメイキングな著作をいくつか書いた。『日本政治思想史』は戦後の研究の枠を決めた。新書『日本の思想』はポピュラーな形式をとりながら、密度の濃い議論を展開し、丸山の思考様式を一般に流布せしめた。いずれも重要な著作であるが、一般性と専門性の間にある『思想と行動』こそ、ひとが日本の現実を考え

るときに常に参照すべき座右の書であろう。本書のなかで指摘された日本の近代思想ならびに政治行動への批判はいまも妥当する。それは日本人の政治的判断力の未成熟を突きつけ、政治的思考の内面的確立を、読むものの心にしみいるように激しく呼びかける。本書は戦後日本の生んだ、その名に値する唯一の、本来の意味での政治哲学の書物である。

宇野弘蔵『経済原論』

いまでは宇野の名前も著作も忘れられようとしている。しかし宇野の仕事は決して忘れられてはならない。宇野は世界的にも独自のマルクス解釈を基にしたマルクス経済学の体系を作ったが、その意義は、その体系性よりも、権威を恐れず自前で批判的に思考することを実践し、読者にもそう教えたことにある。宇野の獨創性が最も如実に発揮されている書物が『経済原論』である（旧版と全書版があるが、旧版がよい）。これをもっていわゆる宇野理論が成立する。彼の資本論解釈には好き嫌いもあるだろうが、ともあれ一人の学者が孤独な思索の上に首尾一貫した学問を築いた事実、日本の学問にとって記

念すべきことだ。その学風は一世を風靡し多くの学徒の心を魅惑した。本当に学問をする精神を知るには宇野理論を一度は繙くべきだ。宇野の文章は悪文の典型であるが、いまではそれも一種の個性の表現として許せる。

平田清明『市民社会と社会主義』

大塚久雄が開拓した市民社会論とマルクスの社会主義論を繋ぐ試みを平田清明がやってみせたとき、社会科学上の市民社会論はひとつの頂点に達した。本書は六〇年代後半から七〇年代前半にかけてのベストセラーの一冊であった。そうさせる理由のひとつは、平田のマルクス研究にあったことも記憶しておくべきである。平田の先輩にあたる内田義彦の『資本論の世界』（岩波新書、これもよく読まれたものだ）は、平田以前に市民社会論の視角から『資本論』を読む試みをしていた。平田は大塚の経済史的市民社会論（と共同体論）と内田の経済思想的市民社会論を結びつけて、これまで対立してきた市民社会と社会主義を統一し、社会主義解釈に新局面を切り開いた。それはソ連型の社会主義への痛烈な批判をひめてもいたのだ。時代はこのような平田の思想を生むほどに

市民社会的になっていた。

廣松渉『世界の共同主観的存在構造』

廣松渉はマルクス研究を一新し、主体主義的または実存主義的マルクス解釈を一掃して、物象化論という独自の概念をもってマルクスの歴史理論を体系的に解釈した。これだけでも彼の仕事は歴史に残る。彼のマルクス解釈の中心は人間を「社会関係のアンサンブル」として定義することである。関係論が鍵語である。これを哲学用語に言い換えると、存在は共同主観的存在である、となる。本書は廣松のマルクス論のなかにあった関係論を哲学的存在論まで拡大してみた。それは廣松哲学の宣言書である。この発展が主著『存在と意味』（全三巻）になる。主著は未完に終わったが、その全貌はある意味では本書のなかにある。ここには今後発展させられるべきいくつかの要素があり、廣松の全体構造すら予告されている。廣松の思想を理解したいのなら、まずはこの本から読むべきだろう。そして本書はこの二十年間に最も影響力のあった哲学書でもある。

小田実『われわれの哲学』

小田の本のなかで歴史的インパクトを与えたものは多分『何でも見てやろう』であろう。それはたしかに新しいセンスをもった世代の登場を告げる書物であった。けれども地味であるが、小田の経験を煮詰めた哲学的省察を記述した本書は、彼の最良の資質がでている。円熟した作家にしてベ平連運動の指導的実践者であり、世界を旅しながら思索する人である小田が自己の内部をじっと見つめるときの精神の動きは、日本にはまれな人文主義的モラリストの気風を感じさせる。しかも歴史的現実の不合理と政治的無残さへの批判精神もまた溢れるばかりにある。フランス語のパンスウール（考える人）が小田にはふさわしい。本書には無世界的な個人主義にも個人を無視する共同主義にもなびかないで、フランスのいい共同性論が展開される。小田の口を通して戦後日本が育ててきた最良の精神あるいはボンサンスが息づいている。経験を思索のなかで煮詰めていく繊細な手続きを学ぶことができよう。プロの哲学者の書物にはない哲学的思索を見たいなら小田の書物が最適である。

浅田彰『構造と力』

ベストセラーになった本であるが、どうしてそうなったのか理解に苦しむほど実は難解な本ではある。本書は現代フランスの思想のいくつかの傾向を実に明快に、しかも的確に把握し、それらの相互関係をきれいに整理して、水準の高い見取り図を描いてみせた。同時代の思想、しかも外国の思想を理解することは一般に想像される以上にむずかしいものである。誰もが全体像を描けるものではない。それをやすやすとやってのけたところに浅田の才能がある。彼はどの思想家を論じるにも自分の個性と好みをはっきりとにじませて書く。そのスタンスが絶妙によい。本書は内容もいいのだが、それ以上に著者の

個性の表現が目すべきである。個性というと気の利いた紋切り型の思いつきをだせばいいのだという軽薄な印象があるが、そうではない。個性は知性の練磨をもって始めて生きること、浅田の本はよく示している。浅田の模倣者が出たようだが、それは知性の酷使を放棄した模倣でしかなかった。若い世代は再度本書を読み、知性を研ぎすすることがいかに重要かを学ぶべきだろう。

ブック・リスト

昭和二〇年代

柳田国男『先祖の話』筑摩書房、昭和二十二年。
花田清輝『復興期の精神』我観社、昭和二十一年。

「ショアー」の衝撃

鶴岡哲・高橋哲哉編 木口コ
ーストの実態を証言した映画
を徹底討議で検証。 1854円

アウシュヴィッツと表象の境界
フリードランダー 3296円

+

黒い肺—旧産炭地からの報告

沢田猛 炭塵に侵された不治
の職業病・じん肺の実態と患者
たちの叫びを伝える。 3914円

+

虹と睡蓮

埴谷雄高 出会いと別れを語り、
『死霊』最終章への予告とも
いえる最新評論集。 2575円

+

身体 光と闇

ポイエーシス叢書28

石光泰夫 ドラキュラから勃
使!川原三郎まで、フロイトを軸
に「身体の可能性」を探索 3605円

+

五感の芸術論

篠原資明 香りや食まで取り
込み、芸術を味わう技法を探
る、刺激的な芸術論。 2575円

+

《復刊書から》

近代日本政治思想
の諸相 [新装版]

橋川文三/4635円

日本ファシズム研究
序説 [新装版]

安部博純/4944円

■1995年版図書総目録進呈

未来社

東京都文京区小石川3-7-2
電話03(3814)5521 (定価は税込)

石母田正『中世的世界の形成』中央公論社、昭和二年。

福田恆存『平衡感覚』真善美社、昭和二年。

林 達夫『歴史の暮方』筑摩書房、昭和三年。

川島武宜『日本社会の家族的構成』学生書房、昭和三年。

石田英一郎『河童駒引考』筑摩書房、昭和三年。

宇野弘藏『経済原論』岩波書店、昭和五年。

丸山真男『日本政治思想史研究』東京大学出版会、昭和二年。

和辻哲郎『日本倫理思想史』岩波書店、昭和七年。

家永三郎『日本近代思想史研究』東京大学出版会、昭和二年。

昭和三〇年代

大塚久雄『共同体の基礎理論』岩波書店、昭和三〇年。

時枝誠記『国語学原論統篇』岩波書店、昭和三〇年。

久野 收・鶴見俊輔『現代日本の思想』岩波書店、昭和三年。

平野 謙『政治と文学の間』未来社、昭和三年。

丸山真男『現代政治の思想と行動』未来社、昭和三年。

竹内 好『近代の超克』筑摩書房、昭和三年。

思想の科学研究会『転向』平凡社、昭和四年。

谷川 雁『工作者宣言』中央公論社、昭和四年。

埴谷雄高『幻視の中の政治』未来社、昭和五年。

橋川文三『日本浪漫派批判序説』未来社、昭和五年。

中村 元『東洋人の思维方法』春秋社、昭和五年。

神島二郎『近代日本の精神構造』岩波書店、昭和六年。

高島善哉・平田清明・水田洋『社会思想史概論』岩波書店、昭和七年。

昭和七年。

色川大吉『明治精神史』黄河書房、昭和九年。

昭和四〇年代

藤田省三『天皇制国家の支配原理』未来社、昭和四年。

高橋和己『孤立無援の思想』河出書房、昭和四年。

内田善彦『資本論の世界』岩波新書、昭和四年。

鶴見俊輔『日常的思想の可能性』筑摩書房、昭和四年。

江藤 淳『成熟と喪失』河出書房、昭和四年。

梅棹忠夫『文明の生態史観』中央公論社、昭和四年。

吉本隆明『共同幻想論』河出書房、昭和四年。

羽仁五郎『都市の論理』勁草書房、昭和四年。

石牟礼道子『苦海浄土』講談社、昭和四年。

上山春平編『照葉樹林文化』中央公論社、昭和四年。

平田清明『市民社会と社会主義』岩波書店、昭和四年。

伊東光晴『保守と革新の日本の構造』筑摩書房、昭和五年。

松下圭一『シビル・ミニマムの思想』東京大学出版会、昭和

四八年。

宇井 純『公害原論』東京大学出版会、昭和六年。

大森莊蔵『言語・知覚・世界』岩波書店、昭和四六年。

廣松 渉『世界の共同主観的存在構造』昭和四七年。

河合隼雄『中空構造日本の深層』中央公論社、昭和四七年。

宇沢弘文『自動車の社会的費用』岩波書店、昭和四九年。

昭和五〇年代

山口昌男『文化と両義性』岩波書店、昭和五〇年。

市川 浩『精神としての身体』勁草書房、昭和五〇年。

坂部 恵『仮面の解釈学』東京大学出版会、昭和五一年。

柄谷行人『マルクスその可能性の中心』講談社、昭和五三年。

網野善彦『無縁・公界・楽』平凡社、昭和五三年。

中根千枝『タテ社会の人間関係』講談社現代新書、昭和五三年。

中村雄二郎『共通感覚論』岩波書店、昭和五四年。

朝永振一郎『物理学とは何だろうか』岩波書店、昭和五四年。

蓮實重彦『表層批評宣言』筑摩書房、昭和五四年。

日高六郎『戦後思想を考える』岩波書店、昭和五五年。

村上泰亮『新中間大衆の時代』中央公論社、昭和五五年。

大塚久雄『近代欧州経済史序説』岩波書店、昭和五六年。

丸山圭三郎『ソシユールの思想』岩波書店、昭和五六年。

木村 敏『自己・あいだ・時間』弘文堂、昭和五六年。

中井久夫『分裂病と人類』東京大学出版会、昭和五七年。

多木浩二『眼の隠喩』青土社、昭和五七年。

今村仁司『暴力のオントロギ』勁草書房、昭和五七年。

中沢新一『チベットのモーツァルト』せりか書房、昭和五八年。

井筒俊彦『意識と本質』岩波書店、昭和五八年。

山崎正和『柔らかな個人主義の時代』中央公論社、昭和五九年。

浅田 彰『構造と力』勁草書房、昭和五九年。

昭和六〇年代以降

小田 実『われわれの哲学』岩波新書、昭和六一年。

歴 史 篇

僕は一九二八年生まれですから、敗戦の年、一九四五年には一七歳でした。旧制高校は戦時中、二年で卒業ということになっていたんですよ。二年の年の真ん中で戦争が終わりましてね。結局また一年半ぐらい旧制高校に行きました。四七年の九月ぐらいに生松敬三たちと歴史研究会をつくりましてね。ヘーゲルの「歴史哲学」を読もうとか、そういう方向でやってたわけです。そこへ、先輩だった永原慶二、柴田三千男さんらが現れて、「お前たち、何をやっているんだ。そんなにモタモタしてちゃダメだ……」とアジられましてね。永原さんが次から次へといろんなものを貸してくださるんですよ。本ではなくて、主に雑誌でしたね。大塚久雄さんの『欧州経済史序説』とか丸山真勇さんの「自然と作為」とか、高橋幸

網 野 善 彦 (神奈川大学)

八郎さんや川島武宣、飯塚浩二、古島敏男さんなどを知ったのも、そのときですね。佐藤進一さんの『鎌倉時代訴訟制度の研究』を一九四六年の六月に買ってるんですね。戦前に出たご本を戦後に目黒書店から三〇〇部出されたのです。それを、大学生になる前に買っているのは、永原さんから「これはおもしろい」と言われたからに相違ないですね。ちょうどその頃、石母田さんの『中世的世界の形成』と、藤間生夫さんの『日本古代国家』が相次いで出ましたし、しばらくして、松本新八郎さんの『名田経営の成立』、清水三男氏の『上代の土地関係』『日本中世の村落』などを手に入れています。

佐藤さんの本は大学の二年生か三年生になって、ようやく読んだんですね。石母田さんの本を早く読んで、そ

れにどんどん引きずられており、その頃からマルクスやエンゲルスやマックス・ヴェーバーなどを読みはじめまして……。学生運動にどんどん深入りしていきますから、一九四七年から四八年にかけては、もっぱらそちらの方に熱心でした。四九年になって、卒業論文を書くという名目で大学に戻るんです。最近出た『戦後を語る』という岩波新書の中にも書きましたが、その頃から特権的な立場に寄り掛かるわけですよ。勉強を始めているんですが、その仕方には、どこか人の意にそうようにしていかうという意識が出てくるわけですね。自分自身の「眼」がだんだん消えていく。

一九五〇年に大学を卒業して、すぐ日本常民文化研究所に入りました。どこにも行くところがなくて、転がり込んだというのが実情ですけどね。なぜ入ったかという事情については、いずれ「戦後の日本常民文化研究所と文書整理」というテーマでまとめるつもりです。この年から、歴史学研究会の委員になりましたが、その頃から国民的歴史学の運動というのが始まる。僕はその督戦隊のような立場で会議会議に明け暮れていました。常民文化研究所には六年間いたのですが、三年間ぐらいはほん

とに仕事はしませんでした。その間にもずいぶん本を読んだと思うんですが、ほとんどなにも残っていない。自分の眼を失った読書はなんにもならないのですね。僕が目が覚めるのは、一九五三年の夏からなのですけども、常民研の中に上原専祿さんの影響を受けた中地昶平君という人がいましたね。この人の僕に対する批判は非常に厳しかった。それがきっかけで、その頃から三浦周行さんや福田徳三さん、中田薫さんの『法制史論集』などを本格的に読みまして、やっぱりこれこそ本物だと……。自分も「封建制度とは何か」といった最悪のものをはじめ、それまでいくつか論文を書いているんですが、その時点でそれまでの三、四年間にやってきたことの空虚さをイヤというほど思い知らされたんです。すべてこれからやり直し……。史料をもう一度全部読み直そうという気になった……。このとき完全に戦後歴史学から落ちこぼれたんですね。歴研からも落ちこぼれました。

その頃から北園高校の教師になります。その時期に支えにしていたのが、佐藤進一さんと、川崎庸之さんのご本でした。素直に史料を読んでいこうとする時、これは非常に強いこころの支えになりましたね。佐藤さんは大

学時代に教えていただけなのに、私はその機会を逸してしまいました。ところが、平凡社の『世界歴史事典』の史料篇をつくる時に、なぜか佐藤さんは僕に蒙古襲来を分担しないかと、さそってくださったんです。モンゴル襲来を本格的に考えたのがきっかけでした。しかし、北國高校で歴史を教えるのにいちばん役に立ったのは、『世界歴史事典』ですよ。あの頃はまだ概説は出てなかったから、大中項目はとても参考になりました。岩波講座の『日本歴史』や中公、読売の『日本の歴史』は現代まで通読したと思います。

その頃は、古典的なものを読み返していました。たとえば、原勝郎とか内藤湖南、内田銀蔵などを熟読していました。ただ、非常に新鮮な感じを持っていたのは、京都の日本史研究会の動きでした。林屋辰三郎さんの本も共感をもって読んでいたんですよ。『中世文化の基調』など、おもしろいと思いましたね。若い世代では、上横手雅敬、黒田俊雄、三浦圭一、それから戸田芳美、河音能平、工藤敬一、大山喬平さんなどですね。また、横井清さんとは、お互いの論文を手紙で批評し合うペンフレンドだったんですよ。広島の坂本實三さんや渡辺則

文さん、九州の川添昭二さんのお仕事にも刺激されましたね。

それから、落ちこぼれの人間として、華やかだなあ、すばらしいなあと思って見ていたのが「中世の窓」のグループですね。須磨千穎、大隅和雄、石井進、笠松宏至、羽下徳彦、勝俣鎮夫さんなどの秀才たちで……。いや到底、これはかなわないと思いましたね。それから、その頃、ほんとの意味で宮本常一さんの仕事の大きさを知りました。一九六五年の前夜、『絵巻物による日本常民生活絵引』の仕事をやられている頃でしょうね。河岡武春さんから話を聞いて、宮本さんの本を次から次へと読みはじめているうちに、民俗学もすごいなと思います。初めて、渋沢敬三さんの『祭魚洞樵考』も読み直し「延喜式」の論文には驚嘆しましたね。柳田国男さんの本を読み出したのもその頃です。津田左右吉さんのご本も、落ちこぼれた時点ぐらいからはほとんど読みました。そうした読書はどこかでいちばん底に沈殿していると思いますよ。

そういううちに、一九六七年に弥永貞三さんのお誘いで名古屋大学に行くことになったわけです。それ以後は、僕自身の仕事にとって大きな意味をもった铸物師

の文書に出会ったり、大学紛争があったり、佐藤進一さんや山口啓三さんに名古屋大学へ来ていただいたこととかいろいろありました。そして、常民研が神奈川大学に招致されたのにもなって、一九五〇年代に借り出したままになっていた古文書を、整理し返却する仕事を再開するために、名古屋大学をやめて神奈川大学に移ったり、実にさまざま面白い出があります。この頃、安田元久さんが御家人制研究会などによく呼び出してくださいましたね。大学時代の友人、塚本学さんとのつきあいもこのころ復活しました。

神奈川大学に行く前、一九七〇年代の後半に阿部謹也さんや、谷川健一、森浩一、大林太良、坪井洋文、宮田登、高取正男さんらと知り合いました。それらの方々の本が続々と出版される時代でしたね。

名古屋大にいた頃、全共闘の時代についてきたのが、文化人類学の山口昌男、川田順造さんの仕事でしたね。それから佐竹昭広君。落ちこぼれ時代に、『民話の思想』を読んで、旧制高校の同級生じゃないかなと思ったり、その通りでした。何十年ぶりで再会した時も、昨日会ったような感じでしたね。僕は一六歳からタバコを

吸っていたんですが、ちょうど五〇周年。つい去年やめたんです。酒はもう死ぬまでやめられないでしょう。(談)
ブックリスト

大塚久雄『欧州経済史序説』上巻、一九四四年、日本評論社。
丸山真男『日本政治思想史研究』(新装)一九八三年、東京大学出版会

佐藤進一『鎌倉幕府訴訟制度の研究』一九四三年、畝傍書房。
『南北朝の動乱』(『日本の歴史』6)一九七四年、中央公論社。

石母田正『中世的世界の形成』一九四六年、伊藤書店(一九八五年、岩波文庫)。

松本新八郎『中世社会の研究』一九五六年、東京大学出版会。
中田 薫『法制史論集 全四冊』一九二六〜六四年、岩波書店。

古島敏雄『日本農業技術史』一九四七年、時潮社。

三浦周行『日本法制史』一九四三年、創元社。
川崎庸之『天武天皇』一九五二年、岩波新書。

『記紀万葉の世界』一九五二年、お茶の水書房。

『世界歴史事典 全二五巻』一九五一年、平凡社。

『日本の歴史 全二六巻』一九六五〜六七年、中央公論社。

永原慶二『日本の中世社会』一九六八年、岩波書店。

黒田俊雄『日本中世の社会と宗教』一九九〇年、岩波書店。

戸田芳美『日本領主制成立史の研究』一九六七年、岩波書店。

河音能平『中世封建制成立史論』一九五一年、東京大学出版会。

工藤敬一『九州庄园の研究』一九六九年、塙書房。

大山喬平『日本中世農村史の研究』一九七八年、岩波書店。

上横手雅敬『日本中世政治史研究』一九七〇年、塙書房。

林屋辰三郎『中世文化の基調』一九五三年、東京大学出版会。

石井進『鎌倉幕府』（『日本の歴史』7）一九六五年、中央公

論社。

笠松宏至『法と言葉の中世史』一九八四年（平凡社ライブラ

リー 一九九三年）。

勝俣鎮夫『戦国法成立史論』一九七九年、東京大学出版会。

羽下徳彦『惣領制』（日本歴史新書）一九六六年、至文堂。

渡辺則文『日本塩業史研究』一九七一年、三一書房。

三浦圭一『中世民衆生活史の研究』一九八一年、思文閣出版。

坂本眞三『日本王朝国家体制論』一九七二年、東京大学出版

会。

川添昭二『九州中世史の研究』一九八三年、吉川弘文館。

横井清『中世民衆の生活と文化』一九七五年、東京大学出

版会。

津田左右吉『日本上代史の研究』一九四七年、岩波書店。

大隅和雄『愚管抄を読む』一九八六年、平凡社。

安田元久『初期封建制の構成』一九五〇年、国土社。

宝月圭吾『中世権威史の研究』一九四三年、敎養書房。

弥永貞三『奈良時代の貴族と農民』一九五六年、至文堂。

阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男』一九七四年、平凡社（ち

くま文庫、一九八八年）。

坪井洋文『イモと日本人』一九七九年、未来社。

宮田登『ミロク信仰の研究』一九七五年、未来社。

森浩一『考古学 西から東から』一九八四年、中公文庫。

山口啓二『鎖国と開国』一九九三年、岩波書店。

『波沢敬三著作集 全五巻』一九九三年、平凡社。

宮本常一『忘れられた日本人』一九八四年、岩波文庫。

『絵巻物による日本常民生活絵引 全五巻』一九八

四年、平凡社。

山口昌男『アフリカの神話的世界』一九七一年、岩波新書。

大林太良『東アジアの王権神話』一九八四年、弘文堂。

川田順造『無文字社会の歴史』一九七六年（同時代ライブラ

リー 一九九〇年）岩波書店。

塚本学『生類をめぐる政治』一九八三年、平凡社

谷川健一『常世論』一九八三年、平凡社

佐竹昭広『民話の思想』一九七三年、平凡社（中公文庫、一九

九〇年）。

政治篇

増田 弘 (東洋英和女学院大学)

(1) 入江昭『日本の外交』(中公新書、1963)、同

『新・日本の外交』(中公新書、1991)

入江昭教授といえは、われわれ外交史家にとってはそびえ立つ山のような存在である。入江氏の処女作である『日本の外交』を私が手にしたのは大学時代のゼミナールの折であり、「脳天に一撃を食らった」ほどの衝撃を覚えた。平板な歴史的叙述の域を出なかった従来の日本外交史に対して、「外交思想」というキリをもって穴をあけた氏は、当時三〇歳を若干越えたばかりであったが、その視点の斬新さ、鋭角的な歴史解釈、表面から沈んだ思想的潮流へのしなやかな感性などは、すでに壮年学者の成熟さを漂わせていた。

以来、氏は私にとって忘れ得ぬ存在となった。一九七

二年夏には、シカゴ大学に近接した入江邸を訪問する機会に恵まれ、初対面にもかかわらず、ご家族の温かいもてなしと同教授の激励をいただいた。すでにこの時点で私は大学院生となっており、いまだ学者となる明確な人生の構図を描いていなかったにもかかわらず、研究テーマの輪郭だけは相当色濃いものとなっていた。その後者の意味で、同教授の励ましは研究者の卵であった私にとって値千金であったことは間違いない。

さてこれら両書の概要であるが、前者が明治維新期から日米戦争終結までを、後者はその続篇として太平洋戦争以後から今日に至る半世紀の日本外交を扱っている。いずれも新書判の、わずか二〇〇ページ程度の概論的小著ではあるが、入江氏の見識・学識が行間にほとばしり

出ていて、重量感に溢れている。日本外交史のみならず、アメリカ外交史、西欧外交史に精通した泰斗であるからこそ、出版可能となった著作といえる。日本国籍を持ちつつ、米国に長く生活基盤を置く著者ならではの対日外交觀察記録でもある。われわれ日本在住の日本外交史家は改めて「灯台下暗し」を実感させられる。しかも国際情勢と日本とのバランス、日本外交における軍事、経済、思想のバランスが取れている。とりわけ従来の日本外交史の学問分野でとかく「従」的位置に甘んじてきた「外交思想」を一本立ちさせた功績は大きいであろう。

(2) リチャード・B・フィン著／内田健三監修『マッカーサーと吉田茂④』（同文書院インターナショナル、1993）

著者は三〇年にわたる国務省官吏生活の間に日本、とくに占領時代の日本と深い関わりを持った。本書はその際の体験をもとに、また学術的見地からの検証も加えて叙述されており、六年八カ月におよぶ占領時代を鳥瞰している。

とりわけマッカーサーや吉田に関する描写は興味深い。たとえば、東京在任中にマッカーサーが面会した日

本人は個人とグループ合わせて一〇〇を超えたが、二回以上面会した日本人となると一五人ほどであり、その中で吉田との会見は七五回と断然多かったことなどである。また吉田については、占領政策を受動的に受け入れた人物ではなく、アメリカ側の重要な政策や指令は彼を通して発せられるなど、フィルターの役割を果たしたとして、その外交的技量を高く評価している。そのほか一九四八年一〇月、マッカーサーは当時国民協同党のリーダーであった三木武夫と長時間にわたって会談し、三木に次期首相になってほしいとの個人的要請を繰り返したが、三木は辞退した事実などにも触れている。

総じて本書は、アメリカ人読者をとくに意識した占領史の概説という形式を取りながらも、既刊書とは一味違う面を持っている。外交のプロとして、吉田やマッカーサーの外交能力を再評価していること（従来GHQに勤務した国務省官吏はマッカーサーには否定的であった）、あるいは占領の勝者は日米両国なのだという、従来のアメリカ人には見られなかった視点から占領期を描き切っているところに本書の最大の特色がある。

(3) 増田弘「侮らず、干渉せず、平伏さず——石橋湛山の対中

国外交論」(草思社、1993)、同『石橋湛山——リベラリス
トの真髓』(中公新書、1995)

大学院当時から石橋湛山を研究対象としてきた私にとつて、これら著作は第四および第五作目になる。なぜそれほど湛山に固執するのかわ問われれば、さる登山家が「なぜ山に登るのか」と尋ねられて、「そこに山があるからだ」と答えたように、私も「そこに湛山があるからだ」と答えるのは些か不遜であろうか。とすれば、抽象的ながら、「湛山には過去と現在と未来とが同居しているからだ」と答えたい。現在に生きるわれわれはまるで観客のように、過去という舞台の上で演じられた歴史の

一コマ一コマを眺めることができる。しかし過去に生きた人々は違ふ。その当時の現在を冷静に位置づけ、将来を見通すことなど不可能であつたろう。ところが言論人湛山は平然としてその不可能なことをやってのけた。まさしく彼は新時代を先取りする思想家であり、言論界に登壇した明治末期からすでに現代の日本を予見していた。それは彼が高唱した「小日本主義」に具現化されている。

前者では日中関係を切り口として湛山の小日本主義の言論と行動を追ひ、平易に論じたつもりである。戦前の湛山は、中国の革命運動と民族主義を終始肯定すると同時に、日本政府や軍部の対中国干渉政策や日本国民の中

雄山閣出版

〈価格は税込〉

海軍大佐の反戦 水野広徳
前坂俊之編 一九八〇円

キーワード日本の戦争犯罪
小田部雄次・林博史・山田朗著 二二六九円

ひめゆりの塔学徒隊長の手記
西平英夫著 一八五四円

日本的風土をはみだした男 大杉栄
松本伸夫著 二五〇〇円

日本ことわざ物語 (新装版)
針原孝之著 一九八〇円

方言風土記 (新装版)
すぎもとつとむ著 一九八〇円

〒102 東京都千代田区富士見2-6-9
☎ 3262-3231 / FAX 3262-6938

国蔑視の態度を悉く批判し、「二〇億の国幣と一〇万の英霊が眠る聖地」とみなされた満州の全面的放棄を主張した。ではなぜ満州が放棄されねばならないのか。満州は中国領土の一部であり、そこには多数の中国人が居住し、農工商あらゆる営業に従事し、財産を所有している。また諸外国は資本を投下し貿易を行っている。にもかかわらず、わが国が朝鮮同様、満州を併合すれば、中国や諸外国から非難を被る。「他国民の領土を割取すること程、国際関係を不安に陥入れ、衝突の原因を紛起せしめるものはない」。今日の常識を湛山はすでに体現していたのである。虚構の大国意識と侮蔑的中国観に彩られた近代の日本人社会であって、それらと無縁であり続けた湛山の存在は、近代日本の辿った挫折の道に大きな教訓を残している。

後者では湛山を言論人・エコノミスト・政治家としてトータルにとらえ、その人間像を描いた。評伝といってもよい。とくに政治家として占領期に石橋財政を展開してGHQと衝突したり、日本の政治家では稀な脱冷戦を唱えたり、また日中貿易を促進し、新首相として期待されながら退陣した経緯を明らかにした。惜しむべくは、

湛山が歴代首相の中で卓越した知性と哲学思想の持ち主でありながら、同時代の日本人がその点にほとんど気づかなかったことにある。石橋内閣は短命すぎたと嘆息せずにはいられない。

ブック・リスト

(1) 日本外交史

※①入江昭『日本の外交——明治維新から現代まで』（中公新書、1963）

②細谷千博『日本外交の軌跡』（NHKブックス、1993）

③池井優『三訂 日本外交史概説』（慶應通信、1992）

※④入江昭『新・日本の外交——地球化時代の日本の選択』（中公新書、1991）

⑤友田錫『入門・現代日本外交——日本国交正常化以後』（中公新書、1988）

⑥永野信利『日本外交のすべて』（行研、1986）

⑦増田弘・木村昌人編著『日本外交史ハンドブック』（有信堂、1995）

⑧孫崎享『日本外交 現場からの証言——握手と微笑とイエスでいいか』（中公新書、1993）

⑨中村隆英『昭和史Ⅰ——1926—45』『昭和史Ⅱ——1945—89』（東洋経済新報社、1993）

⑩猪木正道『軍国日本の興亡——日清戦争から日中戦争』(中公新書、1995)

⑪クリストファー・ソーン/市川洋一訳『満州事変とは何だったのか——国際連盟と外交政策の限界①②』(草思社、1994)

⑫山室信一『キメラ——満洲国の肖像』(中公新書、1993)

(2) 国内政治史・個人史

①後藤基夫、内田健三、石川貞澄『戦後保守政治の軸跡』(岩波書店、1982、現在「同時代ライブラリー」に)

②高坂正堯『宰相吉田茂』(中央公論社、1968)

※③増田弘『石橋湛山——リベリストの真髄』(中公新書、1995)

④原彬久『岸信介——権勢の政治家』(岩波新書、1995)

⑤升味準之輔『戦後政治——1945～55年(上・下)』

(東京大学出版会、1983)

⑥伊藤昌哉『池田勇人とその時代』(朝日文庫、1985)

⑦内田健三『戦後宰相論』(文藝春秋、1994)

⑧伊藤隆他『語りつぐ昭和史1～3』(朝日文庫、1990)

(3) 占領期

①五百旗頭真『日米戦争と戦後日本』(大阪書籍、1989)

②竹前栄治『GHQ』(岩波新書、1983)

③住本利男『占領秘録』(中公文庫、1986)

④袖井林二郎『マッカーサーの二千年』(中公文庫、1996)

⑤H・ベアワルド/袖井林二郎訳『指導者追放——占領下日本政治史の一断面』(勁草書房、1970)

※⑥リチャード・B・フィン著/内田健三監修『マッカーサーと吉田茂①②』(同文書院インターナショナル、1993)

(4) 日米関係

①細谷千博、本間長世編『日米関係史(新版)』(有斐閣、1991)

②神谷不二『朝鮮戦争——米中対決の原型』(中公新書、1966)

③石井修『冷戦と日米関係——パートナーシップの形成』

(ジャパンタイムズ、1989)

④入江昭『日米関係五十年——変わるアメリカ・変わらぬアメリカ』(岩波書店、1991)

⑤松浦晃一郎『歴史としての日米関係——日米同盟の成功』(サイマル出版会、1992)

⑥佐藤隆三『菊と鷲』(講談社、1990)

⑦東郷文彦『日米外交三十年——安保・沖縄とその後』(中公文庫、1989)

⑧神谷不二『戦後史の中の日米関係』(新潮社、1989)

⑨U・アレクシス・ジョンソン/増田弘訳『ジョンソン米大使の日本回想——二・二六事件から沖縄返還・ニクソンショックまで』(草思社、1989)

⑩木村昌人、高杉忠明編著『パールハーバー150年 日本・アメリカ・世界——変容する国際社会と日米関係』(東洋経済新報社、1991)

(5) 日中・日ソ関係およびアジア関係

①田中明彦『日中関係1945～1990』(東京大学出版会、1991)

②緒方貞子/添谷芳秀訳『戦後日中・米中関係』(東京大学出版会、1992)

③入江昭/興梠一郎訳『日中関係 この百年・世界的展望』(岩波書店、1995)

④古川万太郎『日中戦後関係史』(原書房、1988)

⑤毛里和子『現代中国政治』(名古屋大学出版会、1993)

※⑥増田弘『侮らず、干渉せず、平伏さず——石橋湛山の対中外交論』(草思社、1993)

⑦木村汎『日露国境交渉史——領土問題にいかに関わり組む

か』(中公新書、1993)

⑧渡辺利夫『アジア新潮流——西太平洋のダイナミズムと社会主義』(中公新書、1990)

⑨渡辺昭夫『アジア・太平洋の国際関係と日本』(東京大学出版会、1992)

(6) 外交・安全保障・援助

①H・ニコルソン/斎藤眞・深谷満雄訳『外交』(東京大学出版会、1968)

②浅井基文『外交官——ネゴシエーターの条件』(講談社現代新書、1991)

③五十嵐武士編『日本のODAと国際秩序』(日本国際問題研究所、1990)

④船橋洋一『通貨烈烈』(朝日文庫、1993)

⑤松浦晃一郎『先進国サミット——歴史と展望』(サイマル出版会、1994)

⑥永井陽之助『現代と戦略』(文藝春秋、1985)

⑦大嶽秀夫『再軍備とナショナリズム——保守、リベラル、社会民主主義者の防衛観』(中公新書、1988)

⑧若泉敬『他策ナカリシラ信ゼント欲ス』(文藝春秋、1994)

宗教篇

戦争に敗けて、アメリカの兵士がどつとやってきたとき、日本の影がとたんに薄くなった。歴史のなかの日本人の輪郭が極端にぼやけてきた。

そんな戦後の早い時期に、その稀薄になっていた日本人の輪郭を明らかにする試みとして中村元の『日本人の思维方法』（みすず書房、昭和三十三年。「決定版中村元選集第三巻」春秋社所収）があらわれた。これはかれの『東洋人の思维方法』の一面を占める作品であったが、作者の意図はひろく西欧人の場合との比較を視野に入れ、東洋のなかでもとくに日本人のものの考え方がインド人や中国人やチベット人とどう違うかという問題ととりくんだものだった。その「比較」の材料になっていたのが、それぞれの文化圏で歴史的に形成された宗教思想であっ

山折哲雄（国際日本文化研究センター）

た。宗教的なものの考え方感じ方のなかに、日本人の特徴ひいては国民性のようなものを探ろうとしたのである。

戦後日本人の「比較」好きの性向に火をつけたのがこの作品であったように思う。比較による自己認識のパターンである。西欧の「近代」に追いつけ追い越せという明治以来の日本人の強迫観念を方法的に支えたのが、この比較の意識だったのではないだろうか。

この「比較」の方法にたいして全く別の思考ベクトルをさし示していたのが、鈴木大拙の『日本の靈性』（大東出版、昭和一九年）だったと思う。この作品は、昭和一九年という、敗戦直前の時期に出版されている。かれは日本の敗戦を必至と考えていたから、戦後の日本の命運

を見通すような気持で本書を執筆していた。そのかれの予見はみごとに的中し、そのため本書は今日まで途絶えることなく読みつがれてきた。その主題である「靈性」は精神の奥に潜在しているものであり、どの民族にもみられる普遍的な宗教意識である。ところがわが国においては、それが情的方面に開花したのが浄土系思想であり、知的方面に展開したのが禅思想であったという。

この論旨からだけでもわかるように、日本人の「靈性」は鎌倉時代になってはじめて全面開花したのであるといている。日本人の鎌倉仏教好きをみごとにいい表わしているわけであるのだが、その傾向を戦後になって本書はさらに促進する役割をはたすことになったのかもしれない。鈴木大拙は戦前から長期にわたってアメリカで生活し、東洋の宗教や哲学を欧米人に啓蒙する仕事に尽力していたが、その国際的な活動の裏側にはりついていた孤独な体験が「日本的靈性」というテーマに向かわせたのであったのだろう。

右にみた鈴木大拙や中村元は日本人の宗教をどちらかというと空間軸に沿って類型化したといえるが、それについて時間軸に沿って眺望しようとしたのが梅原猛で

あった。かれは日本仏教の特質は動植物や山川国土までが仏になれるとする点にあるとし、それはとりもなおさず縄文時代以来の伝統的な考え方であったと主張した。

この見方は多くの読者を獲得したが、昭和四二年に刊行された『美と宗教の発見』（筑摩書房）では、日本人は楽しみ、喜び、怒りの感情などくらべてとくに「悲しみ」の感情を重視し強調してきたと論じている。これは日本的宗教心の湿潤な性格または仏教の無常観とも通ずる特徴であるといってもいいものかもしれない。

宗教は一般に、内部からも外部からも検討の対象にすることができ、無神論という外部からの眼差しによってそれを徹底的に問いつめたものに吉本隆明の『最期の親鸞』（春秋社、昭和五一年）がある。明治以降、親鸞ほど日本人によってもてはやされた宗教家もいないが、それは神なき近代のニヒリズム的思想風土のなかで、親鸞の宗教だけが一条の光明を発しているようにうけとられたからである。

その代表的作品が「欺異鈔」であるが、吉本はこの著作のなかに見出される「信」と「不信」の乖離の意味を問いつめ、その葛藤の構造を明らかにしている。この親



有斐閣 新刊案内
(定価は税込み)
東京・神田・神保町 2/161-03-3265-6811

鸞論の背後には、陰に陽に聖書の逆説と近代ニヒリズムの論理が投影されていた。その意味において吉本は、日本人・親鸞を論じてほとんど脱日本人・親鸞に到達しているような趣きがある。これにたいして、日本人の信仰の共同幻想そのものに探針を下ろそうとしたのが山本七平の『日本教について』(文芸春秋、昭和四七年)だったのではないだろうか。かれは「軍隊」のなかに、家庭や部落、農村や都会、そして国家にいたるまで、そのあらゆる要素をひっくるめた日本社会の原像があったと考えたが、それとともに日本人独得の秩序感覚として「法外の法」すなわち情状酌量の問題をとりあげ、その人間感情にもとづく結合の構造を「日本教」の名によって説明

しようとした。かれはおそらく日本人の宗教を一神教や多神教、あるいは汎神論や、アニミズムといった西欧産の概念によつては説明しきれるものではないと考えていたであろう。山本自身はこの日本教が世界最強の宗教であるといっているが、しかしその概念はかならずしも明確なものではない。それにたいして「日本教」というターミノロジーだけが一人歩きして流行することになった。

それ以後、日本人の宗教とは何かという問いが提出されるたびに、この山本流の「日本教」という概念がもちだされる風潮が生じた。それは近代の日本人が、日本人の伝統的な宗教をいわば主体的に問いつめてこなかった

経済人類学を学ぶ

栗本慎一郎編著
(有斐閣選書 予定価) 五〇〇円

人間とはつねに経済合理的に行動するものなのか。経済とは効率を追求するものなのか。真の「人間の経済」を考察しなおし、経済人類学の基礎とその可能性を示す。隣接分野の第一人者による論考も掲載した初の入門書。

社会史への途

(有斐閣選書 定価) 二六三円

竹岡敬温 川北 稔編 社会史の形成と主な領域を解説。社会史研究の魅力が伝わる。

死を学ぶ

最期の日々を輝いて

柏木哲夫著 ホスピスの現場から人間らしい死を考える。四六判上製カバー付 定価 一八五四円

現代社会学

(マツリシリーズ 定価) 二七八円

宮島 喬編 社会学独自の方法的特長と、現代社会を読み解く新しい視角を提示する。

新・秘書英語

異文化コミュニケーションの叢

田中篤子・バーナード・サッサー著 全面改訂版。四六判上製カバー付 定価 二六三円

● 図書目録送呈 ●

ことの帰結であったということができるかもしれない。山本七平の「日本教」論もまた、さきの吉本の場合と同様ニヒリズム的思考にもとづく宗教論の一変種なのである。このようにみてくると、たとえばカトリック作家、遠藤周作の小説『沈黙』（新潮社）に描きだされる「転びキリシタン」の問題も、近世という時代の枠をこえてこのような「日本教」への改宗という文脈のなかで読むことが可能になるだろう。

戦後五十年の終末は、七十年代のオイル・ショックをへてバブル経済の狂乱、崩壊という現象によって語られている。その時期に破滅型の人生を生きた俳人、種田山頭火の作品（春陽堂書房、昭和六一年）がもてはやされ、永六輔の『大往生』（岩波書店、平成六年）が大ベストセラーになった。山頭火は禅と俳句のあいだを行きつもとどりつし、漂泊、流浪の旅のなかを生きて死んだ。ほとんど宗教という枠を踏みはずしたような乱暴な生き方が、宗教ニヒリズムの時代の人びとの心をつかんだのかもしれない。それにしても人間誰しも、死ぬときぐらいは何とか安穩に気楽にこの世におさらばしたいと思っている。宗教をどう信ずるかといった高踏的な講義よりも、

われわれはいつたいどのようにして安樂のうちに死にたいならよいのか、——それを教えてくれという多くの人びとの叫びが、永六輔の『大往生』にはこだましているのである。

ブックリスト

中村元『東洋人の思惟方法3 日本人の思惟方法』春秋社、一九八九年。

井上光貞『日本古代の国家と仏教』岩波書店、一九七一年。

黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』岩波書店、一九七五年。

五来重『仏教と民俗』角川書店、一九七六年。

桜井好朗『中世日本文化の形成』東京大学出版会、一九八一年。

高取正男『神道の成立』平凡社、一九七九年。

楠田良洪『真言密教成立課程の研究』山喜房、一九七九年。

大隅和雄『中世思想史への構想』名著刊行会、一九八四年。

福永光司『道教と日本文化』人文書院、一九八二年。

坪井洋文『稻を選んだ日本人』未来社、一九八二年。

波平恵美子『ケガレ』東京堂出版、一九八五年。

倉塚嘩子『巫女の文化』平凡社、一九七九年。

西田長男『日本神道史研究』講談社、一九七八年。

萩原龍夫『巫女と仏教史』吉川弘文館、一九八三年。

村山修一『本地垂迹』吉川弘文館、一九七四年。

速水侑『観音信仰』塙書房、一九七〇年。

横井清『中世民衆の生活文化』東京大学出版会、一九七五年。

山折哲雄『日本人の靈魂観』河出書房新社、一九七六年。

吉本隆明『増補最後の親鸞』春秋社、一九八一年。

堀一郎『我が国民間信仰史の研究』東京創元社、一九五三年。

村上重良『天皇制国家と宗教』日本評論社、一九八六年。

安丸良夫『神々の明治維新——神仏分離と廃仏毀釈』岩波書店、一九七九年。

宮田登『生き神信仰』塙書房、一九七〇年。

三崎良周『台密の研究』創文社、一九八八年。

西郷信綱『古代人と夢』平凡社、一九七二年。

湯浅泰雄『日本人の宗教意識』名著刊行会、一九八一年。

梅原猛『地獄の思想』中央公論社、一九六六年。

佐藤正英『隠遁の思想』東京大学出版会、一九七七年。

日崎徳衛『漂泊』角川書店、一九八九年。

青木保『御岳巡礼』筑摩書房、一九八五年。

谷川健一『青銅の神の足跡』集英社、一九八九年。

宮家準『修験道儀礼の研究』春秋社、一九七〇年。

細川涼一『中世の律宗寺院と民衆』吉川弘文館、一九八七年。

佐々木宏幹『仏と霊の人類学』春秋社、一九九三年。

小松和彦『神々の精神史』福武書店、一九九二年。

大村英昭他『ポスト・モダンの親鸞』同朋社、一九九〇年。

山本ひろ子『変成譜——中世神仏習合の世界』春秋社、一九九三年。

袴谷憲昭『批判仏教』大蔵出版、一九九〇年。

中村生雄『カミとヒトの精神史』人文書院、一九八八年。

鎌田東二『翁童論——子どもと老人の精神史』新曜社、一九八八年。

松尾剛次『鎌倉新仏教の成立』吉川弘文館、一九八八年。

末木文美士『日本仏教史』新潮社、一九九二年。

長谷部八朗『祈禱儀礼の世界』名著出版、一九九二年。

心理篇

日本の臨床心理学がいつ頃成立したのか、は定めがたい。たとえば主な臨床心理学関連学術雑誌である「精神分析学研究」は一九五四（昭和二九）年、「ロールシャッハ研究」は一九五八（昭和二三）年、「臨床心理学研究」は一九六二（昭和三七）年、「心理臨床学研究」は一九八三（昭和五八）年の発刊である。昭和三十年代の始めに岩崎書店から出された『ロージャズ選集』が、来談者中心療法の爆発的な流行を生み出したあたりから、現在よりかなりお粗末なレベルであったにしろ、実践的裏づけをもつ臨床心理学が定着しはじめた、と言ってよいと思う。

その頃バイブル的役割を果たしたのが、友田不二男『カウンセリングの技術』（誠信書房）である。これはロ

氏原 寛（椋山女学園大学）

ジャーズの方法を忠実に相述した内容からなっている。もっとも、実践を重んずるロジャーズにならない、カウンセリング面接の逐語記録が入っている。当時友田は、これまたロジャーズ流のカウンセリングのワークシヨップを全国的に催していた。いわゆる非指示的なその方法が、熱狂的なカウンセリングファンを生み出していたのである。当然友田のカウンセリングも非指示的方法のものであり、それが唯一の正しい方法と信じこむ人が少なくなかった。分裂病もカウンセリングで治ると称して、精神科医の蠶躰を買うカウンセラーさえいた。みんなが暗中模索で、ロジャーズおよびその日本における代表と見なされた友田たちだけが頼りであった。当時大学で臨床心理学を講じる人はいたが、医師を除いて臨床経験の

ある人がほとんどいなかったためである。ロジャーズ派のアクスラインによる『遊戯療法』（小林治夫訳、岩崎書店）や、すでにアレクサンダー・マクレーン『問題児の心理療法』（黒丸正四郎訳、みすず書房、一九五五年）があったけれども、いわばロジャーズブームに乗って、遊戯治療はほとんどこの線で行われていたのではない。

一方心理テストについては、一九五六（昭和三一）年に片口安史の『心理診断法——ロールシャッハテスト』（牧書店）が出た。これはその後『新・心理診断法』として金子書房から改訂増補版が出た。わが国のロールシャッハ研究者の必読の文献である。ただしリサーチ的ないし解説的傾向が強く、実践家が実際の臨床に適用する場合、少し物足らぬ所がある。理論だけでは把握しきれぬロールシャッハテストの妙味が、若干切り捨てられていくからである。

以上のような状況の中で、わが国の心理臨床の実践家に、文字通り痒い所に手の届く思いをもたらしたのが、河合隼雄『カウンセリングの実践問題』（誠信書房）であった。一九七〇（昭和四五）年のことである。彼はその以前一九六七（昭和四二）年に、すでに培風館から『ユ

ング心理学入門』を出している。わが国最初のユング派分析家として、フロイトに比べて今まで神秘的なヴェールに向うに隠されていた、ユング心理学の実践を明るくにもたらし功績は決して小さいものではない。当然そこにもさまざまな臨床的知見は盛りこまれていたのだが、この「実践問題」は、もともとカウンセラーたちに対する連続講義を纏めたものであり、その上質疑応答がそのまま活字になっているだけに、現実のカウンセリング場面で当時のカウンセラーたちのぶつかっていた生まの問題に、河合が具体的に答える形になっている。理論と実際の谷間に落ちこんで右往左往していた当時のカウンセラーたちには、まさしく旱天の慈雨のごとき役割を果たした。河合がユング派であることもあって、ロジャーズ以外の枠組で、結構それに劣らぬ効用をもつ方法論のあることを明示することで、多くの実践家に強烈な印象を与えたものである。もっとも当時は、ロジャーズに批判的な態度を明らかにすると、はじめから受けつけられぬ雰囲気があり、この本でも、ユング派的な態度は極力表に出さぬよう配慮されているように思われる。

この頃から、河合に限らず、外国で訓練を受けてきた

臨床家が続々帰国しはじめ、かつてのロジャーズ一辺倒の傾向が薄れ、逆に百家争鳴ともいふべき時期に入る。

一九六五（昭和四〇）年には、アイゼンクの『行動療法と神経症』（異常行動研究会訳、誠信書房）が出た。学習理論を応用した鮮やかな心理療法の切り口は、とくにアイゼンクが、いわゆる伝統的心理療法に対して容赦のない批判を加え、かつ実証的データを並べた上で論を進めるので、ロジャーズ派をはじめとする旧来の臨床家には大きな衝撃であった。六年後、ウォルピの『行動療法の実際』が内山喜久雄監訳で黎明書房から出ている。他にも当然の動きとして、わが国独自の心理療法の森田療法や内観療法への関心が高まった。三木善彦『内観療法入門』（創元社）の出たのが一九七六（昭和五二）年である。ところでフロイトにしろユングにしろ、あるいはロジャーズにしろ、いずれもヨーロッパ人である。ヨーロッパで開発され一応の成果をあげた理論なり方法が、はたして文化の異なるわが国にも適用しうるのかどうかは、心理臨床に携わる者として、好むと好まざるにかかわらず直面せざるをえない問題であった。そうした背景をうけて、土居健郎『甘えの構造』（弘文堂）が一九七一

（昭和四六）年に出た。この事は、単に精神分析の理論をわが国に受け入れるというにとどまらず、それを踏まえつつわが国独自の方法論ないし病因論を明らかにしたものととして、欧米諸国にも反響を呼び起こしたものである。同じ文脈に属するものとして、河合隼雄『昔話と日本人の心』（岩波書店、一九八二年）を挙げることができる。これはそれまでもっぱらユング心理学の紹介に明け暮れていた（本人のことばによる）河合が、はじめて日本人の心性を踏まえてあらためてユング心理学を捉え直したものである。しかもその内容は、欧米人にも意外な程の反響があり、「甘え」理論が結構国際的に通用することと軌を一にしている。わが国の臨床理論ないし実践が、ぼつぼつ外国の垂流の域を脱しつつある証しとして強調しておきたい。同じく小此木啓吾『モラトリアム人間の時代』（中央公論社、一九七八年）も、とくにその阿闍世解釈において、フロイト派の枠組の内にありながら、日本的な独自性を示したものととして挙げておきたい。

以上、まったく駆け足的に戦後五十年の臨床心理学の文献について概観した。大雑把に言えばロジャーズ時代

から河合時代への変遷ということになる。しかし、そうしたことが突如現われたものではもちろんない。すでに一九五二年、フロイト（丸井清泰訳）『精神分析入門・下』（日本教文社）が出ている。同年、直接臨床心理学に関わるものではないが、たとえばヴェルトハイマー（矢田部達郎訳）『生産的思考』（岩波書店）が出て、実践を志す人々にも大きい影響を与えた。

というようなことなのだが、戦後の目ぼしい本を五十冊と言われると、目うつりしてなかなか選びにくい。幸い筆者は、『カウンセラーのための一〇四冊』『心理臨床家のための一一九冊』（いずれも創元社）を、何人かのすぐれた臨床家と一緒に編集したことがある。それとても独断と偏見に満ちたものではあるのだが、私一人の目よりは客観性があると思う。今回こうした機会を与えられ、かなり迷ったあげくお引受けしたのは、そこから選べば大過なかるうと思ったことが大きい。

ブックリスト

- 一九五一（昭二六）年
フロム、E.（日高六郎訳）『自由からの逃走』東京創元社。
- 一九五二（昭二七）年
ヴェルトハイマー、M.（矢田部達郎訳）『生産的思考』岩波書店。
- フロイト、S.（丸井清泰訳）『精神分析入門 上・下』日本教文社。
- 一九五五（昭三〇）年
アレク（黒丸正四郎訳）『問題児の心理療法』みすず書房。
セシュエー、M.（村上・平野訳）『分裂病の少女の手記』みすず書房。
- 一九五六（昭三一）年
友田不二男『カウンセリングの技術』誠信書房。
ロージャズ、R.（友田不二男訳）『カウンセリング』岩波書店。
- 一九六〇（昭三五）年
片岡安史『心理診断法——ロールシャッハテスト』牧書店。
- 一九六一（昭三六）年
ピンスワンガー、L.（新海・宮本・木村訳）『精神分裂病 I・II』みすず書房。

アクスライン、V. (小林治夫訳) 『遊戲療法』 岩崎書店。

一九六五(昭四〇) 年

アイゼンク、H. J. (異常行動研究会訳) 『行動療法と神経症』 誠信書房。

一九六六(昭四一) 年

シュヴィング、G. (小川・船渡川訳) 『精神病者の魂への道』 みず書房。

ボーヴォワール、S. (生島遼一訳) 『第二の性 上・下』 人文書院。

一九六七(昭四二) 年

中根千枝 『タテ社会の人間関係』 講談社。

一九六八(昭四三) 年

河合隼雄 『ユング心理学入門』 培風館。

オールポート、G. (原谷・野村訳) 『偏見の心理』 培風館。

一九六九(昭四四) 年

ジョーンズ、E. (竹友・藤井訳) 『フロイトの生涯』 紀伊国屋書店。

フロイト、S. (高橋・菊盛訳) 『夢判断』 日本教文社。

一九七〇(昭四五) 年

ローレンツ、K. (日高敏隆訳) 『ソロモンの指環』 早川書房。
ベンダサン 『日本人とユダヤ人』 山本書店。

河合隼雄 『カウンスリングの実際問題』 誠信書房。

ボス、M. (三好・笠原・藤縄訳) 『夢』 みず書房。

一九七一(昭四六) 年

レイン、R. D. (坂本・貴志訳) 『ひき裂かれた自己』 みず書房。

土居健郎 『甘えの構造』 弘文堂。

ウォルピ、J. (内山喜久雄監訳) 『行動療法の実際』 黎明書房。

一九七五(昭和五〇) 年

クライン、M. (松本秀男訳) 『羨望と感謝』 みず書房。
キューブラー・ロス、E. (川口正吉訳) 『死ぬ瞬間』 読売新聞社。

社。

ユング、C. G. 他 (河合隼雄監訳) 『人間と象徴』 河出書房新社。

一九七六(昭五一) 年

三木善彦 『内観療法入門』 創元社。

ミード、M. (畑中・山本訳) 『サモアの思春期』 蒼樹社。

一九七七(昭五二) 年

バシュアール、G. (前田耕作訳) 『火の精神分析』 せりか書房。

エリクソン、E. (仁科弥生訳) 『幼児期と社会』 みず書房。

笠原嘉 『青年期』 中央公論社。

一九七八(昭五三) 年

山中康裕 『少年期の心』 中央公論社。

バリント、M. (中井久夫訳)『治療論よりみた退行』金剛出版。

ハロー、H. F. (浜田寿美男訳)『愛のなりたち』ミネルヴァ書房。

ユング、C. G. (林道義訳)『タイプ論』みず書房。

小此木啓吾『モラトリアム人間の時代』中央公論社。

一九八〇(昭五五)年

エレンベルガー、H. (木村・中井監訳)『無意識の発見 上・下』弘文堂。

一九八一(昭五六)年

アイヒホルン、A. (三沢泰太郎訳)『手におえない子』誠信書房。

マラー、M. 他 (高橋・織田・浜畑訳)『乳幼児の心理的誕生』黎明書房。

一九八二(昭五七)年

フォン・フランツ、M. L. (松代・椎名訳)『永遠の少年』紀伊国屋書店。

河合隼雄『昔話と日本人の心』岩波書店。

カーンバーク、O. (前田重治監訳)『対象関係論とその臨床』岩崎学術出版社。

ワロン、H. (浜田寿美男訳)『身体・自我・社会』ミネルヴァ書房。

中村雄次郎『魔女ランダ考』岩波書店。

一九八四(昭五九)年

河合隼雄・中村雄次郎『トボスの知』TBSブリタニカ。

ミニューチン、S. (山根常男訳)『家族と家族療法』誠信書房。

イリイチ、I. (玉野井芳郎訳)『ジェンダー』岩波書店。

神田橋條浩『精神科診断面接のコツ』岩崎学術出版社。

一九八六(昭六一)年

鈴木知準『神経症はこんな風に全治する』誠信書房。

大井玄『終末期医療』弘文堂。

一九八七年(昭六二)年

田嶋誠一編著『壺イメージ療法』創元社。

ウイニコット、O. W. (橋本雅雄監訳)『子どもの治療相談』

I・II 岩崎学術出版社。

一九八八(昭六三)年

下坂幸之『アノレクシア ネルヴォーザ論考』金剛出版。

教 育 篇

戦時下での潤いの乏しい戦争や時局ものばかりで食傷していた一般読者は、敗戦後は心の糧となる読みものを求めた。教育書関係も例外でなく、今後の日本の教育のあるべき姿を説いた関口泰の『日本の再建と教育』や田中耕太郎・木村素のこの種のものが読まれる。

また戦歿学生の遺稿を通じて改めて戦争とは何かを問いかけた『きけわだつみの声』は、学生層や青年らを超え多くの読者に深い反省と感銘とを与えた。

他方、社会の現実と子どもの生活経験とを結び付け、かつ戦前の生活綴方の伝統を継承して作文教育に知性とみずみずしい感性を注ぎ込むことに成功した無着成恭の教育実践の成果『山びこ学校』は爆発的な売れ行きをみせ、あわせ青年や女性の生活記録運動への火付け役をも

影 山 昇 (東京水産大学)

果たしている。

また昭和二十七年四月の講和条約発効とともに、原爆や占領下の内幕ものの出版が目立つなかで、広島少年少女の原爆体験をまとめた長田新編『原爆の子』は十五万部余の売れ行きをみせている。同じ頃出た壺井栄の『二十四の瞳』も戦前・戦中・戦後にかけて生きたひとりの女教師の姿を描き、多くの読者の共感を得た。

昭和三十年代を迎えると、教育界は文部省と日教組との対決状況が生まれる。その背景の下で、佐賀県教組を舞台に、教員定員削減や地方教育行政の権限の大幅後退及び勤務評定の強行という一連の動きを踏まえ、さまざまな教師群像を描いた石川達三の新聞小説『人間の壁』(『朝日新聞』昭和三十三年八月〜三十四年四月連載)が

大きな反響を呼んでいる。

また昭和二十八年から三十八年までの十一年間にわたり、群馬県佐波郡・島小学校で取り組まれた教師集団挙げて「授業の創造」を目指して成果を挙げた斎藤喜博の『学校づくりの記』を始めとする一連の島小教育関連の本は、多くの教師や親に励ましと勇気を与えた。(筆者も同校教壇に立つ。)

三十年代後半から四十年代にかけてデュニーに迫まるブームを巻き起こしたものがJ・S・ブルーナーの訳書『教育の過程』である。当時の知的爆発の時代に合致し、新鮮かつ鋭角的な問題提起があり、構造・ラセン型カリキュラム・発見学習・直観思考・内的動機づけなど、提案のタイミングも時機にかなうものであっただけにブルーナーの知名度の浸透は抜群であった。

昭和四十年代は教科書問題と大学紛争で教育界は揺れに揺れる。

教科書問題は、東京教育大学の家永三郎教授が執筆した高校社会科教科書『新日本史』(三省堂)に対する文部省検定不合格処分に対して、同教授が四十年六月に違憲・教育基本法違反であると提訴、それ以降、教科書問

題は大きくクローズ・アップされ、家永の『教科書判決と裁判の独立』をはじめとする同教授の一連の著書は注目されることとなった。

また昭和四十三年から四十四年にかけては大学紛争が激しさを増し、その関連の本が多数出版されたが、問題を対象化しつつ、改めて大学の本来のあるべき姿を説いている矢内原忠雄の『大学について』は、問題解決に向けて、示唆に富む内容のものであり好感をもって迎えられた。

あわせ四十年代は、高度経済成長政策下、地域開発がすすみ、過密・過疎が社会問題となり、学校統廃合と地域教育力の低下が進行するなかで、子どもの学習権が問われる状況が日本各地で生まれており、伊ヶ崎暁生編『子どもの学習権と学校統廃合』はその実態に鋭く迫っていた。

昭和五十年代に入ると、高校進学率がついに九〇％台に達して高校教育も準義務教育の性格をもつようになり、進学する生徒の学力のバラツキが著しくなる。かくして高校教師には教科の専門性ばかりか、生徒の非行問題の増加に伴う生徒指導面での力量も求められるように

なった。

陰湿ないじめ、子どもの自殺、登校拒否、青少年非行、校内暴力、学業遅進、偏差値偏重、受験競争の過熱等々、いわゆる教育荒廃の状況が一気に現出したのもこの時期で、総体としての非行原因を究明し、問題対応の原則と現実的な処方方を具体的に提示した山口透の『少年非行学』は時機に適ったものとして好評を博した。

なお五十年代には、障害児教育の制度面での一歩前進があり（五十四年四月実施の養護学校義務制）、津田道夫・斎藤光正編『養護学校義務化と学校教育』は問題の処在を押さえつつ、今後の展望を考察している。

昭和六十年代に入り特記されることは、六十二年十月に「教育の改革推進大綱」が閣議決定をみたことで、生涯学習体系の導入、個性重視の教育の推進、さらに国際化や情報化など時代の変化に対応する教育の展開といった教育改革面での具体化の動きが目立ち始める。

そのなかで改めて十五年戦争とか総力戦体制といった第二次大戦下での戦争と教育との関連を究明する本が生まれており、代表するものに安川寿之輔の『十五年戦争と教育』及び寺崎昌男編『総力戦体制と教育』がある。

さらに教育史研究の方法論をめぐり、従来の官庁文書を一級史料とする制度中心の教育史を批判し、新たに教育のあり方を深いところで実際に規定してきた民衆の生活や彼等の生き方とその心性を掘り起こし、歴史的現実の「深層の長期的な変化の軌跡」を明らかにすべきであると主張する中内敏夫の『新しい教育史』は、その多くが匿名で歴史を生きてきた人びとの立場を重視した姿勢が貫ぬかれていた点で、大いに注目された。

また、昭和六年に長野県師範学校を卒業し、主として長野県で教職につき、戦前から戦後までの約四十年を教師として生きた同年齢集団を対象に、そのライフコースを、アンケートとインタビューでたずね、その資料で、教師としての成長と専門的力量の形成、歴史のなかで直面した問題及び長期の教職体験に基づく教育意見を集約し、まさに昭和教員史を描き出した稲垣忠彦・寺崎昌男・松平信久編『教師のライフコース』は、これからの変化・変動がキイ・ワードの時代の教師のあり方を考えていくための重要な手懸りを提示した力作であった。

いま一冊、読後の好印象がいっまでも続いている本が、前之園幸一郎の『子どもたちの歴史』である。この

本は、一片の木切れから作られた人形が本物の人間になる例のイタリアのコレローディの『ピノッキオ』を題材にして、社会のなかで子どもの生命がどのように扱われてきたか、子どもが大人を小さくした存在ではなく、まるごとの独立した人格をもつ人間として健やかに成長し発達を遂げるとはどういうことなのか等々、今日の子育てや教育に関して基本的な方向を示唆してくれる内容の読みごたえのあるものであった。

おわりに、昭和五十年代から六十年代にかけて『日本近代教育の歩み——幕末維新期の教育の展開』（学陽書房・昭和五十五年）及び『日本の教育の歩み——現代に生きる教師像を求めて』（有斐閣・昭和六十三年）の二冊を筆者も世に問うたことができたことを付記させて頂く。

ブック・リスト

・昭和二〇年代

関口泰『日本の再建と教育』興風館、昭和二十一年。

日本戦歿学生手記編集委員会編『きけわだつみの声』東京大学協同組合出版部、昭和二十四年。

池田潔『自由と規律』岩波書店、昭和二十四年。

大田堯『地域教育計画』福村書店、昭和二十四年。

波多野勤子『少年期』光文社、昭和二十六年。

無着成恭編『山びこ学校』青銅社、昭和二十六年。

海後宗臣『日本教育の進展』東京大学出版部、昭和二十六年。

勝田守一『学校論』要書房、昭和二十七年。

壺井栄『二十四の瞳』光文社、昭和二十七年。

長田新編『原爆の子』岩波書店、昭和二十七年。

・昭和三〇年代——
唐沢富太郎『教師の歴史——教師の生活と倫理』創文社、昭和三十一年。

国分一太郎『教師——その仕事』岩波書店、昭和三十一年。

細谷恒夫編『教師の社会的地位』有斐閣、昭和三十一年。

小川太郎『立身出世主義の教育』黎明書房、昭和三十一年。

斎藤喜博『学校づくりの記』国土社、昭和三十一年。

東井義雄『村を育てる学力』明治図書、昭和三十一年。

石川達三『人間の壁』（前・中・後各編）新潮社、昭和三十三年。

C・P・スノー、松井卷之助訳『二つの科学と文化革命』みず書房、昭和三十五年。

細谷俊夫『教育方法』岩波書店、昭和三十五年。

宮坂哲文『生活指導の基礎理論』誠信書房、昭和三十七年。

J・S・ブルーナー、鈴木祥蔵・佐藤三郎訳『教育の過程』

岩波書店、昭和三八年。

・昭和四〇年代

糸賀一雄『この子らを世の光に』柏樹社、昭和四〇年。

新堀通也編『学園』福村出版、昭和四四年。

宗像誠也『教育行政学序説』有斐閣、昭和四四年。

山住正己『教科書』岩波書店、昭和四五年。

家永三郎『教科書判決と裁判の独立』日本評論社、昭和四六年。

P・ラングラン、波多野完治訳『生涯教育入門』全日本社会教育連合会、昭和四六年。

山内太郎編『学校制度』東京大学出版会、昭和四七年。

矢内原忠雄『大学について』東京大学出版会、昭和四八年。

林竹二『授業・人間について』国土社、昭和四八年。

伊ヶ崎曉生編『子どもの学習権と学校統廃合』労働旬報社、昭和四八年。

昭和四八年。

・昭和五〇年代

槇枝元文『日本の教師たち』三省堂、昭和五〇年。

小沢有作編『民族解放の教育』亜紀書房、昭和五〇年。

DECD教育調査団編、深代惇郎訳『日本の教育政策』朝日新聞社、昭和五一年。

イヴァン・イリッチ、東洋・小沢周三訳『脱学校の社会』東京創文社、昭和五二年。

R・P・ドアー、松居弘道訳『学歴社会・新しい文明病』岩波書店、昭和五三年。

麻生誠『エリート形成と教育』福村出版、昭和五三年。

津田道夫・斎藤光正編『養護学校義務化と学校教育』三一書房、昭和五四年。

詫摩武俊・稲村博編『登校拒否』有斐閣、昭和五五年。

フィリップ・アリエス、中内敏夫・森田伸子訳『教育』の誕生』新評論、昭和五八年。

山口透『少年非行学』有信堂高文社、昭和五九年。

昭和六〇年代

安川寿之輔『十五年戦争と教育』新日本出版社、昭和六一年。

寺崎昌男編『総力戦体制と教育』東京大学出版会、昭和六二年。

年。

宮坂広作『現代日本の社会教育』明石書店、昭和六二年。

中内敏夫『新しい教育史——制度史から社会史への試み』新評論、昭和六二年。

評論、昭和六二年。

稲垣忠彦・寺崎昌男・松平信久編『教師のライフコース』東京大学出版会、昭和六三年。

前之園幸一郎『子どもたちの歴史』永田書房、平成元年。

黒羽亮一『学校と社会の昭和史①②』第一法規出版、平成六年。

年。

流れている現在

——書店店頭三〇余年

人文会ニュース編集部からのご依頼は、〈書店人の戦後五〇年〉、というタイトルでしたが、戦後の書店の移り変わりについては、今までも多くの方が述べておられますし、又一括りにして書店や書店人を語ったり、五〇年に亘ってのその歴史を論じたりするのは、現場だけで過ごしてきた私の任ではありません。店があって棚があつて本があり、読者が居て店員が居る、私が三〇数年過ごした店頭現場は、真に〈流れている現在〉の連続でした。その現場にこだわりつつ、特に専門書（書籍・単行本）との関わりを踏まえ、独断的に、店頭の〈流れている現

岩波ブックサービスセンター
柴田 信

在〉のそれぞれを振り返り、与えられた責めを果たしたいと思います。

1

私がこの業界に入った一九六〇年代の中ごろは、書店の、売場スペースの拡大政策が目立ち始めた時期でもあり、本のデパートなどという看板をかけるお店があったり、〈書店はスペース産業である〉と言った論調も見られたりして、それぞれの店頭には積極的な気運が溢れておりました。

そして、一九七〇年代の終わりには、東京駅八重洲口に八重洲ブックセンターがオープン、新規参入の書店であること、そして、その立地、その規模（七五〇坪）から言って話題性も充分、そのデビューぶりは実に衝撃的でありました。一方、神田神保町の老舗・三省堂書店が、創業一〇〇年を記念して、売り場面積九八〇坪の新本店ビルをオープンさせたのは、二年後の一九八一年の三月でした。これらは、六〇年代初頭から始まったスペース拡大政策の一つの頂点とも言える象徴的な出来事だったのです。

ここに至る迄の二〇年間、書店は空間の可能性をひたすら追い続けました。紀伊國屋書店梅田店、旭屋書店池袋店、そして、既存の丸善に加えて、セゾングループ・リプロの参加、又、地方の群雄の蜂起等々、真に東西・新旧入り乱れての、陣取り合戦さながらの様相でした。新規開店のニュースが業界紙を飾り、A店は初日の売上何百万円、B店は一千万円を超えた、C店は地域一番店になった等々、時代の波にも支えられ、概して順調に推移していききました。〈大きい事は良いことだ〉の懐かしい時代を想起する事が出来ます。実際、店頭の盛況振りも

半端でなく、大量の商品・来店客数の飛躍的増加、特に、四月の新学期をピークにしたその手応えは、書店の意欲をいやが上にも湧きたたせた時期でもあったのです。その活況を背景にした書店は、立地と広さと利便性を更に追求、随所に大型店舗を誕生させていきました。大胆に言ってしまうえば、この一九六〇年代の始めから一九八〇年代初頭あたり迄を、〈多くの書店が不特定多数の顧客を対象に、拡大再生産に励んだ時期〉と位置づける事が出来ます。取次店も版元も、この小売書店の伸張に呼応し、時には支え、時にはリードしながら、成長への道を共に走り続けたのです。もちろん、専門書も、そして専門書の出版社も、その例外ではありませんでした。

2

しかし同時に、この目覚ましい成長の過程で、返品問題を始めとして、それまでもあった負の部分が、いっそう肥大化し、そこから生ずる矛盾と混乱も、更に、更に広がっていきました。成熟の頂点の内側で、大量生産・大量送品、そして大量返品という構図が、業界を横断的に混乱させていったのです。判型も取引条件も全く違う

それぞれの出版物、それに、書籍も雑誌もマスセール向きの商品も少数の専門書も、委託も買い切りも常備も客注も一緒になって、流れだし、それぞれの現場の悲鳴はたかまるばかりでした。状況を憂うる業界人の声が、業界紙の一面を飾るようになったのもこの頃でした。

こうして、成熟の、この時期を境にして、それまでの不特定多数を対象にした考え方から、販売の対象を特定化する方向へ、言い換えれば、偶然性から確実性への転換が求められていくのは、当然の成り行きでもあったのです。そして、それは、書店の店頭よりはむしろ、益々肥大化する流通現場の矛盾に、より多くの経営的危機感を持った版元の側に顕著に現れ始めました。すなわち、版元の営業から見た本の販売とは、

何を………企画の問題

何処で………書店の問題

誰に………読者

の三つを、どう追究するかに尽きますが、この中で「誰に」を特定することは難しいにしても、「何処で………書店の問題」を絞り込む事は可能です。つまり、適切な書店に適切な量をという、筋の通った対書店政策を、どの様

にもちうるのか。そして又、書店がどの様に応えていけるのか。間に立つ取次店は、とりわけ扱い量の多い大手は、どう考えているのか。成熟と同居する混乱の中から、三者三様に合理化を目指して歩き始め、そして、続けられました。

3

さて、適切な書店に適切な量を、と言う想いは、業界をあげての願いですが、とりわけ、専門書版元にとっては、悲願とも言うべき切実な問題で、成熟以前、あるいは成熟の過程にあっても販売の合理化を研究し続けていました。歴史的に言えば、かつて、この問題に組織的、且つ、継続的に取り組んだグループがありました。それは、今はなき須長文夫氏（元オーム社社長）率いる工学書協会です。販売実績をベースにした工学書協会の特約店制度は、後の、この種の仕組みに多くの影響を与えました。「理工学図書ニュース」の発行が、一九五一年、それから、地方特約店視察旅行、スリッパの共同回収による書店の実態調査資料の作製、常備寄託制度の確立、工学書目録の制作、「理工学図書ニュース・書店版」の発行

等々、試行錯誤を繰り返しながらも特約店制度の厚みを増していきました。そして最も重要な事は、この活動の底流に、〈相手の立場に立つ取引〉と言う思想が一貫して流れていた事です。業界三者の平等性が具体的に貫かれていた事です。もっと言えば〈適切な書店に適切な量を〉配る事と、〈それらの書店で本が売れるようにしむける〉事との一致を目指したことでした。昨今、リテイル・サポートと言う用語が広く使われますが、小売店支援が販売促進のうで重要視されてきた時代だからでしょう。我々の業界でのリテイル・サポートの始まりを、故須長氏の、又は、工学書協会の活動に見るのは、ひいき目にすぎましようか……。

工学書協会の活動は、書店店頭にも少なからず影響を与えましたが、それ以上に刺激的だったのが、一九六五年の人文会の発足でした。会員各社の多様性からいって、扱う本のジャンルもその裾野が広く、書店の店頭に棚を確保して、人文書としての市民権を得るなど、その積極的な取り組みは、書店とのコミュニケーションをより濃密なものにしていきました。ジャンルの違い、その幅の広さから、工学書協会とは若干趣を異にしていまし

たが、書店との取引上の関わりにおいては共通するものが多々あり、特に、注目すべきは、その考え方の一致でした。常に、〈書店の立場に立つ〉と言うリテイル・サポートの思想が、中平千三郎氏（東大出版会・名譽顧問）から相田良雄氏（元みすず書房役員）へと続く歴代の代表幹事を通して進化を重ね、それによって書店の士気にかんがりの好影響を与えたと記憶しています。

そもそも、委託制度という現行の条件下で、その、メリットを活かす最も有効な方法は、徹底的なデーター主義だと思われます。即ち、リアルタイムのデーターの回収とそれに基づく需要予測の実現です。何が売れるかは特定できませんが、〈何が売れたか〉と、〈何が在庫されているか〉は特定する事ができます。

一九五〇年代からの工学書協会、一九六〇年代からの人文会、それぞれの歴史は、この、店頭の〈流れている現在〉を、より正確に捉えるための持続する運動でした。多くの試みのすべては、店頭データーをリアルタイムに求めるためのものでした。考えてみれば、グループとして組織的・継続的に、書店の店頭と関わってきたその付き合い、そのひたむきさの積み重ねは、書店現場をめぐる

今日の、様々な問題意識や、レジのPOS化・出版VAN（その他）を始めとする、新しく具体的な方法論に、必ずやオーバーラップされている筈なのです。そして更に、試行錯誤・紆余曲折を繰り返しながら、時代は確実に進んで行くとおもわれます。

そして、今、一九九五年……

近頃の本の売れ行きの不振はただものではありません。単なる不景気だけでなく、私の実感では、とらえどころのない不気味な感じさえしてきます。頻発する社会的事件が、長引く不況感と重なり合って店頭を直撃、私達はこれほど訳の分からない低調振りを経験した事がなく、かつてのオイルショックの時とは違って、その領域の深さ広さに、正直、戸惑いの色を隠す事ができません。書店現場の〈今〉は不透明そのものなのです。

しかし、だからと言ってどんな時代のどんな状況でも、書店の仕事は〈読者と本との出会いを演出し、読者の求める本を速やかに調達する事〉であり、その事の継続によってしか〈店頭読者を存在させる事〉は出来な

いのです。再販・消費税・取次間競争・且つてのそれとは全く違う次元の出店ラッシュと、問題山積の店頭の〈今〉こそ、変化にゆるがず、しかもその事を踏まえながら、状況に即応しなければならぬと言う、難しい時期を迎えているのです。

王道は一つしか無いと思っています。

四年目の春『BOOK LIST 1994』

吉川弘文館 横井真木雄

『BOOK LIST 1994』をお届けします。この人文会と歴史書懇話会による年間発行図書一覧の刊行も今年で四年目となりました。何度も書いていくのですが、『BOOK LIST』の特色はTRC、日販、大阪屋の三社のMARCナンバーを記載した新刊を、NDC順に掲載してある点です。ISBNコードナンバーも収載していますから、コンピュータを導入されている

図書館さんでは、どのコードナンバーを使っても簡単に検索出来ますので、ぜひ蔵書調査や選書・発注にご利用下さい、というのが毎年の口上です。

おかげで『BOOK LIST』の存在はかなり知られてきたようです。ライブラリー・アド・サービスによるお届けに始まって、全国図書館大会や図書館問題研究会大会、各地のブックフェアやブックフェスティバルでの配布、各書

店・生協・図書館販売会社さんにもお願いしていますから、皆さんにも毎年ご覧いただけていることと思います。最近是新設館の準備室などからバックナンバーの送付を希望されることも増えてきました（九一年版は品切れ、九二、九三年版は三〇部ほど残っています）。とは言うものの果たして必要な方のお手元にたどり着いているか、心許ないのも事実です。どうかこの文章を読まれて、まだ

『BOOK LIST』なるものにお目にかかったことがない、という方はお送りします！ぜひご連絡下さい。

両会所属の出版社も三五社になりました。人文会、歴懇という社会科学や歴史の出版物を想像されるでしょうが、分野的には人文系を中心に自然科学から芸術、文学までかなり幅広いものとなっています。掲載点数も三〇〇〇点弱まで増えました。昨年の日本の新刊書籍の総発行点数は五万余点ですから、この三五社では六％の点数を刊行したことになります。自分たちで出しておきながら、ちょっと新刊が多すぎるのではないか、という気がします。確かに現在の出版業界は新刊依存になっています。生産も流通も小売りも収益の構造が「新刊」へと傾斜しています。でも、本当はじっくり本を作りたいし、じっくり売ってきたい、と私などは思っています。

だからこの『BOOK LIST』もそんなふうにご利用していただきたい、と思うのです。無味乾燥の書名の羅列に見えるかもしれませんが、最初の頁からじっくり眺めて下さい。私は職業柄皆さんよりは切実なので、鶴の目鷹の目表読み裏読み、真似できる企画はないかしら（オットー）、『BOOK LIST』から社会情勢まで読みとっています（これから書名をつけたこともあります、ホンマニ！）。気になる本に印を付けて私なら「買う、買わない」、うちの図書館に「要る、要らない」とやってみて下さい。「買った方がよい」と思った本は発注して下さるとないうれしい。

去年の図書館問題研究会全国大会の出版流通分科会で、高松工業高専の大森さん（四月から筑波大学へ異動されました）が「選書評価の試み」と題して、『BOOK LIST』九一年版から、人

口一〇二〇万人都市の公共図書館及び中規模大学の図書館を対象として、その規模で揃えるべき本を一〇〇点選び、これを購入するには年間図書費二〇〇万円、受け入れ冊数一〇〇〇〇冊が必要だと報告されました。「これでは難し過ぎて客が来なくなる」などの反対意見も出て、会場でもかなり議論が沸騰しました。出版人も加えて、こうした議論をもっとしたらよいと思います。社内の企画会議や館内の選書会議では出てこない、面白い議論になることは請け合います。

そんなわけで四年目の『BOOK LIST』、今年もよろしくお引き立てのほどを、改めてお願い申し上げます。

九五年度委員会活動について

六月八日年次総会を開催し、九四年度の活動報告および会計報告を行い、次いで九五年度の新体制を決定いたしました。

代表幹事には引き続き菊池明郎氏（筑摩書房）が、書記に武一雄氏（雄山閣出版）が留任し、会計に後藤光行氏（日本評論社）を新しく選任いたしました。

次に人文会を構成する四つの委員会の委員長に今年度の活動予定・抱負等を語ってもらいました。

販売企画委員会

委員長 清水 博（社会思想社）

前任の福田さん（みすず書房）より引き継ぎ、今年度の販売企画委員長を仰せつかることになりましたので、

よろしくお願いいたします。

当委員会は、書店・取次店様の皆さまと、より密着した活動を行っていく委員会と言っても過言ではありません。『すぐれた人文書の普及・販売を積極的に推進する』ため、各種の企画提案、セット企画等、読者との初めての出会いの場をより多く作りたいと思っております。販売企画をお考えの際はぜひ、各委員にお声をかけて下さい。

おもな活動としては、昨年同様、特約店・準特約店・セット店訪問（南東北・北陸・大阪・奈良・兵庫）を、五コースに分かれてお伺いし、アンケートのご協力をいただきました。これらの貴重なご意見等をもとに、より効率の良い「人文書セット」企画を目指し努力していく所です。また、次年度の「人文書セット」は、取

次店様より年末のご案内をして、三月～四月に書店様にお届けする予定です。

次にフェア関係ですが、今年は戦後五〇年と言う事で、関連書フェアを全国の書店様で実施させていただきます。

最後に、今年度の販売企画委員会のメンバーを紹介します。

副委員長 吉田信夫（東京大学出版会）

委員 古川 清（青木書店）

氏家富男（勤草書房）

福田晴行（みすず書房）

杉田敬三（ミネルヴァ書房）

調査研修委員会

委員長 濱地正憲（誠信書房）

人文会の会則に「すぐれた人文科学書の普及と販売を積極的に推進する」とあります。その手段として、当会は委員会制度を設けています。過日、開催された第二十八回総会におきまして、再び調査研修委員長に選出され、

今年一年活動することになりました。メンバーとして平石副委員長、市川委員、原田委員、浴野委員の計五名の構成です。

当委員会はその名のとおり調査部門と研修部門の活動があります。調査については、昨年度末に行いました特約店調査の分析があります。特約店調査結果の書店様一覧表やその分析につきましては次回の「人文会ニュース」において発表できると思います。

また、業界動向をみますと流通も大きく変革していくと思います。書店様でのPOSレジの導入や情報ネットワークとしての業界VANが書協の元で推進されておりますし、取次各社の送品体制も充実してきているようです。そして、消費税の今後の動向や予断を許さない再版制度の問題などをしっかりと見据えながら活動していきたいものと考えております。

研修におきましては、この秋、北九州地区の特約書店様を訪問させていただきました。交流を図りつつ、勉強させていただく所存です。

書店様研修会の時に、人文書は分類などが難しいので「人文書販売マニュアル」みたいなものが作成できない

ものかとよく言われます。このマニュアル作りに何とかなり組んでみたいと考えております。

書店様で棚構成を考えてみたいとか、こんなシステムを考えているとかなどがありましたら当委員会までお申し出下さい。一緒に模索しながら活動が推進できたらと思っています。

図書館委員会

委員長 尼子 英二（紀伊國屋書店）

会の定めで委員長留任となりました。昨年は、都立図書館、市川市立中央図書館の訪問・見学を行なって良い刺激を受けましたし、人文会各版元の出版物の蔵書調査を行なって欠本についてのご注文を頂くという実利的活動も活発に行ないました。本年も、この路線は引き続き行なっていく予定で、ご協力を図書館様や書店様をお願いする事になりますので何卒宜しく願います。

一方、昨年の反省として、いくら精力的に図書館訪問を行なっても、それは極く一部の図書館に過ぎないのではないか、それが、専門書普及にいかほどの役に立って

いるのかという思いです。いわば、点と点をボツン、ボツンと当たっている感じです。これはこれで、大事なことだとは信じていますが、本年は、もっと大きな視点で面として図書館というものを捉えて行きたいと考えています。つまり、専門書を広く豊かに図書館に備えて頂くためのシステム作りとでも言うのでしょうか。「そんな方法があれば既に誰かがやっている筈である」という反論は、聞き流して、とりあえず挑戦したいと思います。何かのコラムで読んだと記憶していますが、次のような趣旨の文章でした。

「最近、電車の中でまともな本を読んでいるのは女性が多く、男性は、少年漫画週刊誌かスポーツ新聞が多く、半分位は居眠りをしている。これでは、益々女が利口になり、男はバカになる」私も確かに事実だと思いますが、反面、最近、図書館から借りたきちんとした本を読んでいる中高年の男性も増えていと思っています。小部数発行のため、読みたくとも仲々買にくい価格の本がこういう形で普及することは、おおげさに言えば、ひとつの文化ではないでしょうか。

今年の図書館委員会の方針は、やや抽象的ですが、専

門書普及を怒涛の如く行なうためにどう図書館と協力出来るのか、どう対応したら良いのかということにしたいと思います。

一緒に考え行動してくれるメンバーは、次の通りです。

副委員長 島田 孝久（晶文社）

委員 阿部 昇（吉川弘文館）

委員 田村 謙二（有斐閣）

弘報委員会

委員長 土屋知可夫（福村出版）

今年度の当委員会の委員長を務めることになりました。一年間宜しくお願い申し上げます。

本委員会は、人文会の活動報告を行うとともに会員社の出版物の宣伝をも担当いたしております。活動報告は「人文会ニュース」（年三回発行）で、出版物の宣伝は「新刊月報」（毎月発行）で行っております。

「人文会ニュース」においては、各委員会とより密接に連絡しあって会の活動を積極的に紹介していきたいと考

えています。特に、販売に結びつく情報そして提案をしていきたいと思えます。〈重厚〉なイメージが「ニュース」にはあるかと思しますので今年度は〈少し軽く〉を目標にいたします。

新委員会のメンバーをご紹介します。

副委員長は鈴木龍太郎氏（春秋社）、委員は重光義彦氏（創元社）、丸山正美氏（平凡社）、吉田哲夫氏（未来社）です。

人文会会員名簿

(〒111 台東区蔵前 2-5-3 筑摩書房内)

1995. 8. 現在

	社 名	担当者	〒	所 在 地	電 話	FAX
	青 木 書 店	古川 清	101	千代田区神田神保町 1-60	3219-2341	3219-2585
	大 月 書 店	原田 敦雄	113	文京区本郷 2-11-9	3813-4651	3813-4656
	御茶の水書房	平石 修	113	文京区本郷 5-30-20	5684-0751	5684-0753
幹 事	紀伊國屋書店	尼子 英二	156	世田谷区桜丘 5-38-1	3439-0128	3439-3955
	勁 草 書 房	氏家 富男	112	文京区後楽 2-23-15	3814-6861	3814-6854
幹 事	社会思想社	清水 博	113	文京区本郷 3-25-13		
				中銀本郷3丁目ビル	3813-8105	3813-9061
	春 秋 社	鈴木龍太郎	101	千代田区外神田 2-18-6	3255-9611	3253-1384
	晶 文 社	島田 孝久	101	千代田区外神田 2-1-12	3255-4501	3255-4506
幹 事	誠 信 書 房	濱地 正憲	112	文京区大塚 3-20-6	3946-5666	3945-8880
	創 元 社	重光 義彦	162	新宿区山吹町 334-11	3269-1051	3269-1092
	草 思 社	浴野 英生	150	渋谷区神宮前 4-26-26	3470-6565	3470-2640
代表幹事	筑 摩 書 房	菊池 明郎	111	台東区蔵前 2-5-3	5687-2680	5687-2685
	東京大学出版会	吉田 信夫	113	文京区本郷 7-3-1		
				東京大学構内	3811-8814	3812-6958
幹 事	日 本 評 論 社	後藤 光行	170	豊島区南大塚 3-12-4	3987-8621	3987-8590
幹 事	福 村 出 版	土屋知可夫	112	文京区小石川 1-3-17	3813-3981	3818-2786
	平 凡 社	丸山 正美	152	目黒区碑文谷 5-16-19	5721-1234	5721-1239
	法政大学出版局	市川 昭夫	162	新宿区市谷田町 2-14-1	5228-6271	5228-6010
	み す ず 書 房	福田 晴行	113	文京区本郷 5-32-21	3814-0131	3818-6435
	ミネルヴァ書房	杉田 啓三	607	京都市山科区日ノ岡堤谷町 1		
				(075) 581-5191 (075) 581-0589		
			162	新宿区市ヶ谷山伏町 5	3267-3849	3235-9539
	未 來 社	吉田 哲夫	112	文京区小石川 3-7-2	3814-5521	3814-8600
幹 事	雄 山 閣 出 版	武 一雄	102	千代田区富士見 2-6-9	3262-3231	3262-6938
	有 斐 閣	田村 謙二	101	千代田区神田神保町 2-17	3265-6811	3262-8035
	吉 川 弘 文 館	阿部 昇	113	文京区本郷 7-2-8	3813-9151	3812-3544

販売企画委員会 ◎清水 ○吉田(信) 古川 氏家 福田 杉田

調査・研修委員会 ◎濱地 ○平石 原田 浴野 市川

図書館委員会 ◎尼子 ○島田 田村 阿部

弘報委員会 ◎土屋 ○鈴木 重光 丸山 吉田(哲)

草思社

米軍が記録した日本空襲

平塚征緒編著 B29が撮影した初公開の写真を中心に
日本空襲の全貌を伝える決定版記録。 定価2500円

アメリカはなぜ日本に

原爆を投下したのか

R・タカキ／山岡洋一訳 軍事的には必要なかったのに、
なぜ？ この謎を解明した衝撃の書。 定価1600円

米英にとつての太平洋戦争(上・下)

C・ソーン／市川洋一訳 対日戦争の裏面の、権益と
覇権をめぐる米英中の闘いを描く。 定価各4944円

〒150 東京都渋谷区神宮前4-26-26 ☎03-3470-6565

モンゴロイドの地球

〔全5巻〕

私たちの遠い祖先 先史モンゴロイドのたどった壮大な移住と拡散のドラマ。

●A5判・並製カバー装・平均二四〇頁

各巻二六七八円(税込)

1 アフリカからの旅だち

赤澤 威編

2 南太平洋との出会い

大塚柳太郎編

3 日本人のなりたち

百々幸雄編

4 極北の旅人

米倉伸之編

5 最初のアメリカ人

大貫良夫編
〔9月刊〕

東京大学出版会

113 東京都文京区本郷7 Tel.03-3811-8814

エツフェル塔試験論

松浦寿輝

近代の極点に特権的な記号として屹立する
「塔」を魔術的エクリチュールで読み
解く記念碑的力作。 図多数。 3900円

哲学について

ルイ・アルチュセール 今村仁司訳

カトリシズムの救済の理念とマルクス主義の解放の思想
との統合をめざした孤高の哲学者の到達点。 2900円

筑摩書房

東京都台東区蔵前2-5-3 * 定価税込

◎過保護・親バカの行き着く先は…

だれかがどうにか

症候群

1597円

無気力・依存型、オタク型、軽
薄・草率型など、具体的な症例
を時代精神の変貌の中で解明
し、その対処法を提案する。

頼藤和寛／著

◎耐えてつくす妻は家族をダメにする

魂の家族を求めて

斎藤 学／著

アル中、薬物依存や性的な虐待、過食症、拒
食症などからの解脱を求める人々の痛み
1854円の本質に迫り、癒しのプロセスをたどる。

日本評論社

豊島区南大塚3-12-4 ☎03-3987-8621

法政大学出版局

■ ものとな人間の文化史 ■

和船 I・II

石井謙治 千石船を軸に遣唐使船から幕末の洋式船まで、船をめぐる日本史を展望。(I)2987円(II)2472円

草木布 I・II

竹内淳子 草木繊維を利用してゆたかな衣生活文化を営んできた庶民の知恵を発掘する。(I)(II)各2472円

すごろく I・II

増川宏一 盤すごろくの数奇なる運命を辿り、絵すごろくに時代の相貌を読みとる。(I)2884円(II)2987円

〒162 東京都新宿区市谷田町2-14-1
☎03-5228-6271 振替00160-6-95814

〈最新刊〉

心の声

J・V・ワーチ著／田島信元 他訳
媒介された行為への
社会文化的アプローチ

未完のヴィーゴツキー心理学とバフチンの豊穡な言語学的概念装置を結合し、精神がいかに社会文化的に状況づけられているかを解説。
△判 審五〇〇円

■好評既刊

伊藤 守・小林直毅著

「社会と情報ライブラリ」

情報社会とコミュニケーション

構造主義以降の言語とコミュニケーションの理論やポストモダンの文化理論に依拠し、情報社会論の影に隠れてきた課題を論じる。
△判 審三〇〇円

東京・文京 小石川 1-3
福村出版

電話 (03) 3813-3981
定価は税込

植樹祭

河野修一郎 昭和天皇お手植えの苗木をめぐる戦後五〇年の重さを表象化した表題作をはじめ、六短篇を収録。一五八円

バルカン半島

ヘッシュ 歴史の転換期に砲火に包まれるヨーロッパの火薬庫・バルカンの複雑な歴史を読み解く。佐久間穂訳 六八八円

東南アジア史のなかの近代日本

萩原宜之・後藤乾一編 交易から軍政、ODAまで東南アジアとの過去と現在を問う専門家16氏のシンポジウム。五六八円

フランス革命事典

フュレ／オズーフ 現代歴史学の英知を結果として、民主主義の基礎に迫る「読む事典」。河野・阪上・富永監訳 一五七〇円

みすず書房

東京文京本郷
3丁目17-15

同時代人の見た 中世ヨーロッパ 十三世紀の例話

アロン・Ya・グレーウィチ 訳 中沢敦夫

聖職者が信徒に語り聞かせた教訓的な物語・伝説(例話)を素材に、中世ヨーロッパ民衆の意識の深層にせまる。創造的弾力に富む中世文化像。収録図版235点。■定価 7,200円(税込)

ミオリア監訳

歴史学の革新

アロン・Ya・グレーウィチ 訳 栗生沢猛夫・吉田俊則
「アナル」学派との対話
■定価 3,200円(税込)

平凡社

東京都目黒区碑文谷5-16-19
〒152/振替00160-0-26539
TEL. 03-5721-1234

新編 吉三峠 原爆詩集

解説◆中野重治・鶴見俊輔
被爆詩人・峠三吉の魂の叫びを、被爆50年の今年、鶴見俊輔氏の新解説を加えて復刊。 ¥1080

敗戦前後

昭和天皇と五人の指導者

吉田 裕・荒 敬ほか◎著

昭和天皇、近衛文麿、幣原喜重郎、片山 哲、服部卓四郎、吉田 茂——彼らの思想と行動を軸に敗戦と戦後処理の意味を問い直す。 ¥2369

青木書店

東京都千代田区神田神保町1-60(税込)
TEL[03]3219-2341 FAX[03]3219-2585

ミネルヴァ書房

MINERVA西洋史ライブラリー

①社会史の証人

W・ウッドラフ著 5000円

②アメリカ禁酒運動の軌跡

岡本勝著 4000円

③都市国家のアウトサイダー

P・マケクニー著 3500円

④近代英国の起源

越智武臣著 6000円

⑤ヴィクトリア時代の政治と社会

村岡健次著 4000円

⑥知の運動

田中峰雄著 6800円

〒607 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
電話075(581)0296 振替01020-0-8076

日本の侵略 漫画に見る日中戦争時代 中国の抵抗

石子 順著

A5判・25000円

侵略と抵抗——歴史の苛酷な局面の中で日中両国の漫画家たちは戦争や人間をどう描き、どう生きたのか？

大月書店 東京都文京区本郷2-11-9
電話03(3813)4651(代表)

事典 昭和戦後期の日本 占領と改革

百瀬 孝著 戦後、進駐軍の占領のもと、悉く改変されていた旧組織・制度の現在に至るまでの変化を詳述。 5820円

漫画に見る一九四五年

清水 勲著 敗戦がもたらした最も過酷な年、一九四五年に描かれた数々の漫画、凝縮された時代のドキュメント。1751円

若き特攻隊員と太平洋戦争 その手記と群像

森岡清美著 迫り来る死の足音を聞きながら、切々と綴った手記をもとに、任務の達成に殉じた若者の群像を描く。2369円

吉川弘文館

東京都文京区本郷7-2・電 03-3813-9151



勁草書房

*定価は税込

正村俊之
秘密と恥 日本社会のコミュニケーション構造
秘密を中核にして編成される日本人の社会の作り方。 3914円〒340

岩田靖夫
ソクラテス
ソクラテスの〈反駁的対話〉に含まれる論理と哲学。 2884円〒340

落合仁司
地中海の無限者 集
東西キリスト教の神・人間論 集合論で解く無限神学。 2060円〒310

伊奈正人
若者文化のフィールドワーク
もう一つの地域文化を求めて 90年代の若者の本音。 2884円〒340

〒112 東京都文京区後楽2-23-15
電話3814-6861 側00150-2-175253

戦後50年記念出版

無答責と答責

—戦後50年の日韓関係—
寿岳章子・祖父江孝男編

「日韓基本条約」締結30年、日本のアジア・太平洋侵略戦争に対する日本の「無答責」を問う日韓知識人たちの答責シンポジウムと声明。

A5変型 220頁

定価2472円

御茶の水書房

東京都文京区本郷5-30-20 ☎03-5684-0751

ベトナムへの道 定価三〇〇〇円
日越貿易の歴史と展望
中原光信著 日越貿易の中心的な役割を担ってきた著者がベトナム現代史、ビジネスのための案内など盛りこんだ決定版。
日本人は何を見たか? 定価二二〇〇円
田村研平著(海外旅行記の昭和史) ツーリズム大衆化の幕開けは第一次大戦後のこと。日本人論とも読める。二二〇〇円
宮澤賢治をめぐる冒険 水や光や風のエッセイ
高木仁三郎著 高頭祥八 絵 まったく新しい賢治論。二二〇〇円

東京・本郷 **社会思想社** (3813) 8101

(狂気と王権) 井上章一

天皇制にかかわる事件の容疑者につきまとう精神鑑定影……。精神鑑定と天皇制の関係をめぐり、明治・大正・昭和の歴史の裏側に鋭く迫る話題作! ●定価1800円

ボードリヤール×吉本隆明 世紀末を語る

あるいは消費社会の行方について

世紀末の〈現在〉とはどういう時代であり、どこへ行こうとしているのか。ポスト冷戦の世界認識から消費資本主義社会の〈死〉まで、熱い議論を戦わす。●定価1400円

紀伊國屋書店

出版部：東京都世田谷区桜丘5-38-1
☎03(3439)0128 (営業) 表示価は税込み